
7 Days

八王女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7 Days

【Nコード】

N3904E

【作者名】

八王女

【あらすじ】

主人公の絵美は、ずっと片思いをしていた虎之助に彼女ができ、落ち込んでいた。そんな時、自称天使という男が現れて…1週間だけ好きな人と付き合えるならあなたは誰と付き合いますか？感想頂けたら大変うれしいのでよろしくお願いします。

ブローグ

目覚まし時計が電池切れ。

いつもより 30分も遅く起きてしまった。

携帯電話も電池切れ。

充電したつもりが コンセントに繋がれていなかった。

化粧をしようとしたら ファンデーション切れ。

星屑のように 好き勝手に散らばるソバカスを見せたまま

マンションから出ると大雨。

傘を取り忘れて また部屋に戻る。

家を出てすぐ 4羽のカラスを見た。

黒猫の死骸も見た。

乗るはずのバスが 目の前を通過した。

ああ 今日は絶対についていない。

次のバスが来るまでの30分間。

私は これから起きる嫌な出来事を想像する。

この大雨だ。

もしかして 雷が自分のところに落ちたりして。

しかし

現実には 雷より衝撃的なものを用意していた。

「絵美 オレ彼女出来たんだ。」

虎之助は私に会うなり そう言った。

「えっ？」

私は はっきりと聞こえた台詞を 雨音で聞こえなかったとごまかす。

「だからオレに 彼女ができたんだよ！同じゼミの相模と付き合っているんだよ。」

虎之助に 彼女ができただけでも認めたくないのに
彼女の名前まで 聞いてしまった。

言葉を失い 虎之助を見つめる私。

虎之助は 私は驚いて言葉を失ったと思っている。
けれど 本当は

悲しかった。

私は 一気に地獄へと落ちたのだ。

「お前には直で言いたかったから 黙ってたんだけど。驚いたべ？」
自分の鼻を触りながら いつもの照れ隠しをして 虎之助は言う。

「驚いたっていうか…」

失望？

幻滅？

とにかく 頭の中は真っ暗。

虎之助が誰かのものになったの？
認めたくないよ。

「やだよ 私。」

声を出したものの 口を開けすぎていたせいか
喉がカラカラで声が出なかった。

小さく出た声は 簡単に雨音で消えた。

「えっ？なんて言った？」

瞳を潤ませて 唇を震わせている私。

この表情で気づけよ このにぶちん！！

「私 嫌だから。」

私の声や雨音を打ち消すように
授業開始のベルがなった。

ジリリリリ

「やべ 講義だ。」

虎之助はそう言いながら さらっと私に背を向ける。

もちろん 私は体を動かすことができず 立ち尽くしたまま 言葉を
を呟く。

「最悪だ。」

0 日目

私の名前は井上 絵美。

あと1週間で21歳になる学生だ。

そして

今まで1度も彼氏を作ったことがない。

それは 好きな人がいたから。

名は 静谷 虎之助。

幼稚園からずっと一緒の幼馴染。

バカみたいに信じていた。

中学生の時に指きりした約束を

そのために 今まで彼氏を作らずにいた。

それなのに それなのに ああ それなのに…

「彼女ができるなんて！」

学食名物のハタハタオムライス。

ただ国旗の旗が刺さった 普通のオムライスだ。

私は そのハタハタオムライスにスプーンを思いつきりさした。

10時前の食堂。

生徒が全くいない静かな空間に 突き刺したスプーンの悲鳴が響く。

まさか今日 唯一あった講義が休講になっていたなんて

どこまで自分ついていないんだろう。

私は突きささったスプーンを睨みつける。

食堂には今流行りのミュージックが流れている。

この曲 虎之助が勧めていた曲だ。

「KIYOSHIって奴が歌っているんだけど マジでいいんだよねえ。本人もすっげえかっこいいし。」

星を埋めたようにキラリと輝く虎之助の目。

幼稚園の頃から変わらない 私の好きな目。
シンワリ。

瞳に涙。

やってらんない。

私は 勇者が剣を抜くように 勢いよくスプーンを抜き取った。
そして オムライスを食べる。

食べないとやってらんない！

早食い選手権のように ガツガツとオムライスを食べ続ける。

「あつ エミちゃんおった！」

男にしては高くて 線が細い声が聞こえた。

「もう 探したわぁ。ほんま どこにもおらんだもん。」
艶がない黒い髪。

その髪と対照的の真っ白いブラウスをきた男。

あの声の持ち主だけある。

男も華奢で ぱつと見だしたら女に間違えそうだ。

「いやぁ 会えて良かったわぁ。めっちゃ嬉しいわ。」

男はそう言つて 私の前の椅子に座る。

私は手を止める。

そして 口にケチャップをつけたまま口を開く。

「あんた誰？」

数粒の米が男に向かって飛んだと思う。

この汚い格好を見せても 男は笑顔。

「僕は天使だよ。」

瞳が細くなる。

なんだ これ。

私 今 新種のナンパにあってるの？

天使って

確かに 白い服着てるし 華奢だし

天使のイメージに近いかもしれないけど

でも 天使って 初対面で天使って…

頭の中は 予想外の状況に困惑。

言葉を出すことができず 天使と言う男を見つめ続ける。

「エミちゃんを助けに来たんよ。」
そもそも 名前 だ。

この男 私の名前をなぜ知ってる？

思わず手に持っていたスプーンを落とす。

「ちよつと 気持ち悪いんですけど。」

自分の感情をストレートに言ってしまうのが 私の悪い癖。
明らかに拒絶した言葉を吐いたのに 男は相変わらず笑顔。

「エミちゃん 今まで一度も彼氏作ったことないでしょう？」

男に私の声は届いているのだろうか？

私の反応に逆らって 男の会話は進む。

「バカみたいに ずっと1人の男を好きやったんね。」

「ちよつと なんでそれ知ってるの！」

思わず声を大きくしてしまう。

だって 誰にも言ったことはない。

私が虎之助を好きだなんて。

ずっと ずっと ずっと

「ずっと 自分の中だけにおさえてたん？」

男の瞳が うるんと潤った。

カラーコンタクトでもしているのだろうか？

男の瞳はおかしく 瞳孔に銀色の縦線が見えた。

私は 男の瞳を見つめずにはいられなくなっていた。

これが瞳に吸い込まれるということだろうか？

「僕は天使や。」

男はそう言って ゆっくりと私の手を握った。

男の体温は冷たく 私の手は震えた。

「僕 エミちゃんにめっちゃ感謝してるんよ！ほんまに ありがとうでいっぱいなんよ！」

大きく開いた瞳を細くして また笑顔を作る。

「だから お礼に エミちゃんの好きな男と付き合わせてあげるよ。」

なんなんだ この男は？

「もう虎之助でもええし あっ なんなら初恋だった幼稚園の先生にする？」

私のことを知りすぎている。

誰にも言っていない秘密まで知っている。

それはなぜ？

天使だから？

そんなのウソに決まっているじゃん。

私は 一瞬でも男を天使だと思ったことがおかしくて
口元を緩ませる。

男は 自分が天使と認められたと勘違いして 握る手に力が入る。

「でもね僕 力が足らんくて…その1週間分の力しかないんよ。

つまり、エミちゃんは1週間しか、好きな人と付き合えんよね。それでもええかなあ？」

話を1ミリも信じていないのに 男は話を具体的ににして持ってくる。
手を握られていて この場所から離れられない。

何よりも 私の全てを知ってる この男が怖くてしょうがない。

男から 早く離れたかった。

「わかった。それでもいいから。」

要は認めてしまえば男は去る。

私は ウソをついて男の話に乗る。

「私に彼氏を作ってください。」

棒読みで台詞を言う。

それなのに男は 大喜びをして拳を上げ

「やったあ！！」

と叫んだ。

さきほども述べたが ガランとした食堂。

男の声が響く。

私はずっと握られた手が離れたことに安心して
大きくため息をつく。

良かった。これで離れることができる。

「でっ 誰がええ？」

離れることばかり考えていた私。

突然 予想外の言葉を言われ言葉を失う。

「えっ？誰って…」

「エミちゃんが付き合いたい人。」

虎之助がすぐに浮かんだ。

しかし 声に出さなかったのは

このインチキ男を信用したことになるのが嫌だったから

たださえ 虎之助に彼女が出来て落ち込んでいるのに

バカみたいにこの男の話信じて

虎之助の名前言って

実はどつきりでした！みたいなオチされたら

私 本当に立ち直れない。

どうせ 騙されるなら そう どうせ騙されるなら

絶対 付き合えないような男の名前にしたらいい

例えば…

グルグルと考える中 ふと曲が聞こえてきた。

ずっとバックミュージックで流れていた曲。

そして 私の頭の電球が光る。

「・・・し。」

「えっ？」

大声で言えなかったのは

非現実的なことを言っている自分が恥ずかしかったから。

でも この男が離れてもらうためには言わないといけないんだ！

「KIYOSHIと付き合いたい！！」

言ってやった。

私は なぜか息切れをしながら 男を見つめた。

男は 自分の黒い髪を触れながら

「なんや エミちゃん。虎之助じゃなくてええんや。」

少しだけ声を低くして言った。

もしかして この男 虎之助の知り合い？

私を騙そうとしている？

それなら 尚更 虎之助の名前なんて言えない。

「虎之助はもういいの。私はKIYOSHIがいいの！」

私がそう言つと 男は また瞳を大きくする。

「ええの？本当にKIYOSHIで。」

銀色の縦線が 少しだけ濃くなる。

私の心の奥を見られている気になった。

もちろん KIYOSHIよりも虎之助が大好きだ。

付き合えるなら 断然 虎之助だ。

でも まだ何も知らない男に すべてを見せるわけにはいかない。

「いいの。KIYOSHIがいいの！」

「よつしゃ。じゃあ エミちゃんの願いを叶えたるで。」

男はそう言つと 私の頭のとっぺんに触れた。

先ほどまで冷たかった体温。

けれど 今はすごく暖かい。

「神様 僕の願いです。エミちゃんとKIYOSHIを付き合わせ
てあげて下さい。」

神様？

僕の願い。

私の願いじゃなくて？

小さな疑問が ささくれのようにチクチクしたけど

それも一瞬のこと。

私の瞼は一気に重くなり 私はそのまま眠りについた。

1日目 act・1

チリリリリリ…チリリリ…

もう1回 チリリリ… さらに チリリリ…

目覚まし時計がしつこく鳴る。

思いっきり眉間にしわを寄せたまま 私は目覚まし時計を止めた。

もう朝なの？

てか 朝早すぎない？

だって私 昨日何してた？

何か めちゃくちゃついてなくて 本当についてなくて

虎之助に彼女できちゃったりして それでハタハタオムライス食べたりして

そしたら天使って名乗る変な男に会って 彼氏作ってくれるとか言
って

KIYOSHIがいいって言ったら じゃあ叶えようって言うてく
れて…

なんか なんだか ありえないことだらけ。

てか こんな話 誰かに話したら信じてくれる？

いや誰も信じてくれないだろう。

特に天使が出るあたり んで 彼氏を作ってくれるあたり

虎之助に話したら 「お前 夢見たんじゃないやねえ？」 って言われるだ
ろう。

ああそっか

私 夢見てたんだ。

なんて 長い夢を見たんだろう。

私は 頭の上に置かれている携帯電話を持った。

つい最近買い換えたばかりの auの携帯電話。

いやいや 携帯電話と言わないんです。

ウォークマンケータイと言ってますよ。

音楽好きなんで SONY好きなんで ちょっと高かったけど買ってしまったんです。

もちろん 虎之助も色違いで買いました。私はピンク色で虎之助は青色。

これで 毎朝 すがすがしい音で起きれるな。

虎之助は さっそくアラーム機能を設定していたけど

私は ジリリ…となる目覚まし時計が好きで ジリリのまま。ええ

SONY泣かせのアナログ派です。

とにかく ケータイを手に持ち 適当にボタンを押して黒い画面を明るくする。

私は 今までの出来事が 夢かどうか確信するため

画面に映っている日付と時間を確認する。

やばい 今日も10分ぐらい寝坊してるわ。

これは化粧 手抜きでいかないと駄目だなあ。

いやいや 見るのはそこだけではない。問題は日付だ。

私は 重い瞼を無理やりこじ開けて 日付を見る。

残念。

日付が変わっている。

3秒ほど 茫然。何も考えられず 私は画面を見つめ続ける。

すると 着信メール音が鳴る。

ピリリリ…と3秒。

メールアドレスを登録していないと鳴る着信音。

チェーンメールかメルマガかと思いつながらも メールを確認する。

【おはよう。

今日は仕事がオフ。

エミちゃんは何時まで学校？

今日は1日中 一緒にいたい。

潔】

何？このアマアマなメール。読んでもただで 体温上昇するんです
けど。

てか 潔って何？
名前なんだろう。けど 潔って何？

1日目 a c t . 2

潔という字がK I Y O S H Iと読めた時

私は 夢だと思ってたことが現実だと実感する。
そう。

目覚まし時計が電池切れしていたことも 携帯電話も電池切れして
いたことも

ファンデーション切れしたり 傘を取り忘れて また部屋に戻ったり
4羽のカラスを見たり 黒猫の死体を見たり 乗るはずのバスが
目の前を通過したり

とにかく ついてない日々が現実にあつたことを実感した。

そして 私に天使が現れて 彼氏を作ってくれたことも。

しかも その彼氏が その彼氏が！！

「私の彼氏 K I Y O S H Iなんだよ！」

ケータイを水戸黄門の印籠のように持ち（もちろん 画面に映って
いるのはK I Y O S H Iからのメール） 校舎へ向かう虎之助に見
せた。

「はあ？」

虎之助は 大きく欠伸をして 少し瞳を潤ませていた。

そして虎之助の右腕には 今にも折れそうな細い腕が絡まっていた。
そうだった。

虎之助には彼女がいたんだった。これも現実だったのだ。

「おはようございます。朝から元気ですね。」

虎之助の彼女となった相模は ウフフと笑いながら私を見た。

ずっとつきたかったポジションに立てなかった私は ニヘッと無理
に笑い 相模を見る。

相模め。私が何十年も前から予約していたポジションを とりや
がって…

いやいや。今 相模を恨んでいる場合じゃない。

「だから 私の彼氏がK I Y O S H Iなの！」

虎之助に見せていたケータイ画面を自分に向けて 確認する。
あの子のメールのやり取りだ。

【おはよう キヨシ。

仕事OFFなの？超うれしい。

私も 今日は講義なしなんだよ。

でもちよつと用事あるから 大学に行つてから会おう。

エミ】

【そうなの？じゃあ大学まで迎えにいくわ。

潔】

【本当？じゃあ 大学で待つてるね。

エミ】

頭がグルグルしていて てんばつていたのに こんなメールをしつかりと送れるとは

自分の応用力の良さに自信がつく。

「お前さあ 昨日から変だよな。」

ケータイ画面を見つめ ウフフと笑う私を見て 虎之助は顔を少し青くする。

「昨日 朝会つただけで帰っちゃたし 夜も連絡つかなかったし 何してたの？」

「いやあ それが記憶全くなくて。気付いたら今日？みたいな？」

「オレ 結構心配したんだぜ。絵美 ちよつと元気なかつたし。」

虎之助 気づいてくれたんだ。

私のテンションの低さ。

でも気づいてくれないんだね。なぜ 私がテンション低かつたか。優しいんだか 優しくないんだか 虎之助の優しさはいつもフワフワと浮遊している。

綿菓子みたい 甘いんだけど掴んだら溶けちゃうみたいな感じ。

だから触らずにいたのに そしたら違う子に取られたよ。

私は相模を睨む。相模は 私の視線に全く気付かず 虎之助をうつ

とりと見つめている。

相模め。私が何十年も前から予約していたポジションを とりやが
つて…

「だいたい K I Y O S H I が彼氏って 何そのバレバレのウソ？」
何度も繰り返される思考に虎之助がストップをかける。

「ウソって…ウソじゃないし 本当だよ！」

私はもう一度ケータイの画面を虎之助に見せる。

しかし 虎之助はプイッと顔を横に動かした。

「そんなメールいくらでもウソつけるだろう。だいたい 何で絵美
とK I Y O S H I が付き合えるんだよ？」

告白がどうしてできるんだよ？そもそも 絵美とK I Y O S H I の
接点は？」

いや なんか昨日天使が来てさあ 付き合わせてくれるって言った
んだよね。本当 驚きだよね？

なんてことを言える訳がなく 私の口はチャックを閉めたように
しっかりと閉じた。

言葉が出なくなると 虎之助はプイツとした顔を元に戻し 私を見
て笑う。

「あまりくだらないこと言うなよな。」

そして相模の顔を見つめ 早く学校行こう 講義始まるな。と言い
校舎へ向かっていく。

相模は ウフフと笑いながら 私のことも名前で呼んでほしいなあ
と甘えている。

相模め。私が何十年も前から…

お決まりになりそうな台詞を頭に浮かべながら 私は門の前で2人
のラブラブっぷりを見つめている。

虎之助 本当に彼女できたんだ。

腕組んじやってさ。私なんて アルコール飲んで酔って やつと虎
之助の肩触れられる程度なのに。

私はケータイ画面をもう一度確認する。

虎之助の言う通りじゃん。

こんなメール 私がメルアド知らない人が送ってK I Y O S H Iになりすませば できるじゃん。

でもさあ。虎之助 少しくらい驚いたりしても良かったじゃん。

K I Y O S H Iと付き合ってることではなくて 私に彼氏が出来たことに

ちょっと驚いて ちょっと嫉妬したりしてくれたらいいに。

あんなにもきつぱりとウソと言い しかも笑われて 彼女と腕組んじやって

ジンワリと瞳に涙が生まれ始める。

なんだよ。

なんで 私がこんな目に会わなきゃいけないの。

ケータイ画面がぼやけて見える。

そもそもさあ 誰だよ。こんなK I Y O S H Iになりすました奴はさあ？

って あいつしかいないじゃん。あの僕は天使って言ってた奴。

あいつなんだよ。この最初のメールで エミちゃんって呼ばれている時点で気づけよ。

なんだよ！慣れ慣れしく「エミちゃん」って言ってさ。

私の名前を言って良い男は 虎之助だけなんだから。

他の男には 絶対名前で呼ばせてなかったんだから。

それなのに慣れ慣れしく「エミちゃん」って呼びやがって 今度呼んだらビンタだ ビンタ！！

「エミちゃん！」

背後から 早速聞こえる。

来やがった自称天使。

やってやるわ ビンタ！

私は勢いよく 180度回転する。

昨日のついてなさや 私をからかったこと なによりも虎之助に彼女が出来たこと

いろんな怒りを 自称天使にビンタすることで納めようとした。
でも ビンタするつもりなのに 右手はグーになっていた。

あっ このままだと私 自称天使にパンチするわ。

そう思いながらも グーをパーにするつもりはなく 私は声がした
顔に向かって右手をのばす。

しかし 殴るギリギリになって手が止まる。

もう 寸止め。ピタッと動きを止めた。

「おいおい どうしたんだよ？エミちゃん怖い。」

自称天使ではなかった。

肌チヨコ色だし 髪の毛茶色でちよつとパーマかけてるし
口にタバコなんて加えてるし 目が切れ目でこつち睨んで 少し怖
いし

明らかに 私よりひと回り年上の35前後の男が 私の名を呼んで
いる。

あなたは誰？

自称天使がいたんだ。あの自称天使とは対称的だから…

「あなたは自称悪魔？」

男は口に入れていたタバコをポロリと落とした。

そして切れ目を一の字にして 瞳だけで笑みを作った。

「ああ。エミちゃんを誘惑してる悪魔です。」

この2日間で 天使と悪魔にあったよ。どちらも自称だけど。

もう 頭がこんがらがってグチヨグチヨになってる中

登校していた学生が大声で叫んだ。

「きゃー K I Y O S H I が来てるよ！！」

やべ。

私 K I Y O S H I と付き合いたいって言ったけど

K I Y O S H I の顔って一度も見たことがなかったんだ。

とりあえず K I Y O S H I の車に乗せてもらった。黒色のピカピ
カの車。

「とりあえず どこ行こうか？」

じゃあ とりあえずCDショップへ。

CDショップ行つて とりあえずCDを探す。

もちろん探しているのは KIYOSHIのCDだ。

そしてKIYOSHIの写真を見る。

肌の色も髪の長さも同じだ。でも髪の色は ちよつとジャケットに映っているほうが明るい。

けれど 間違いなくKIYOSHIだ。

とりあえず確認したらCDショップを出て KIYOSHIがいる車へと向かう。

「あれ メルセデスベンツじゃん。超すげえ。」

まじで この黒色ピカピカ車ベンツなの？

私 何気にベンツに乗ってたの？すごいじゃん 自分。

いやいや すごいのはベンツだけじゃない。

私の彼氏は やっぱKIYOSHIなのだ。

しかも 自称天使ではなく 天使に叶えてもらったのだ。

典型的かも知れないが 私は思いつきり頬をつねった。

痛いし。じゃあ 夢ではない。

私は今現実にいる。

「どうしたの？早く入れよ。」

ポンつと肩を触られた。私は触った人を見る KIYOSHIだ。

クラつと頭が揺れる。

これ 本当に現実にしちゃっているのだろうか？

クラクラとする私には KIYOSHIは言う。

「次はどこ行く？」

とりあえず 病院に行きたいです。精神科か脳外科か。

2日目 act・1

ジリリと目覚まし時計は鳴らない。
鳴ったのはウォークマンケータイ。

昨日 目覚まし機能を設定したのだ。

だから KIYOSHIの歌が聞こえてくる。

昨日は KIYOSHIとデートはできなかった。

私が緊張して ガチガチになっていて 言葉数少なくて

KIYOSHIは 体調が悪いんだと誤解をした。

それで CDショップの後は 私の家に送られた。

「明日夜から空くから マンション泊まりに来て。

マンションまでの地図 メールで送るし。キー渡しておく。」

玄関でスぺアキーを渡され

「じゃあな。」

おでこにキスされた。

おでこが火傷した。

熱くて熱くて 私は家に帰るなりベッドに倒れた。

それから夜 虎之助からメールが来た。

【今日 学校にKIYOSHI来たんだってな。

取材人がいっぱい来てて この学生でKIYOSHIの彼女がいるけど知らないか？って聞かれた。

絵美が言ったこと 本当なの？KIYOSHIと付き合ってるの？

トラ】

【今さら 驚くなよ。ばああああか！

エミ】

【バカって…そんな怒らないで。

幼馴染の縁でサイン求む。

トラ】

やっぱり彼氏が出来たことには ちっとも驚きも嫉妬もしないこと

に 私はへこんだ。

でも 後から来た K I Y O S H I の地図付きメールを見て 喜んで
ケツ 誰が虎之助のことで落ち込むか！！

と思い 虎之助とのメールに返信を送らなかった。

そして 明日の予定を考えていた。

学校は午前中だけ 午後からは買い物に行こう。

もちろん 新しい服を買おう。

いつものユニクロやライトオンなんかには行かない。

全然縁はなかったけど 前から着て見たかったんだ。 リズリサのワ
ンピース。

白色でフリルがついたワンピースを買おう。

そしてお泊りだと言うからには 勝負下着を買わないとなあ

やっぱり下着も白で統一？いや ここは思い切って黒がいいかな？

いや赤とか？

考えながら ムフフと笑って いつの間にか寝て朝になる。

ケータイを取り 目覚まし機能にSTOPをする。

寝ている間に来たメールをチェック。

【絵美 怒った？そんなんでも 怒るなよ。

頼む サイン下さい（＜|＞）

トラ】

【おはよう。

今日の夜 楽しみにしてる。

潔】

虎之助のメールは放っておいて

K I Y O S H I に即効 返信メールを送った。

2日目 a c t . 2

高校3年の冬。私は焦っていた。
受験勉強ができていなかったからではない。

彼氏ができていなかったからだ。

もっと正確に言えば 好きになった人が今まで2人しかいなかったからだ。

相手は 幼稚園の先生と虎之助。

恋愛事態に縁がない私。

なのに 周りはポンポンと彼氏を作る。

エミ 彼氏いないの？やだあ 超おかしくない？

そんなことを毎日言われてしまったら 催眠術のように 私はおかしい人だと思い込んでしまう。

彼氏が欲しいと焦りながらも 好きなのは虎之助だけで 約束を守りたいから 彼氏作れず。

心に2つの意見が戦っていて バランスが上手く取れなくて 恋愛ストレスにかかっていたかも。

そんな時に 友人が言ってくれた。

「人はね 平等に恋愛量があるんだよ。彼氏ほいほいと変えてたら 少しずつだけ恋愛量が減るの。」

今エミは全く恋愛してないなら たくさん恋愛量が残っているんだね。

いいなあ これから彼氏できたら その1人の人にたくさんあげられるんだよ。

だから とりあえず感覚で恋愛量減らしちゃダメ。慌てちゃだめだよ！」

卒業した後知ったんだけど 友人は担任の先生と不倫をしていて 最近になって 先生が離婚をし めでたく結婚をしたらしい。

ふむふむ 恋愛量かあ。

私 その恋愛量少しも使っていなかったから 天使が下りてご褒美くれたのかな？

あの時は よし！虎之助に全部使ってやる！！って思ってたけど 実際はKIYOSHIに使っちゃってる。

でも構わない。私は今 幸せを実感してるんだから。

「ちょっと 井上って奴出てきてくれない！？」

本日最後の講義が終わり これから買い物しようとして席を立った時だった。

バアアアンと 教室のドアが開き ドドドンと5人ほどの女たちが入ってきた。

そして 私を呼んでいる。

てか いかにもこれから拉致します。 的な雰囲気だしてはあい 私 井上です。

なんて言うか。

私は立ったまま教卓に立ち尽くす5人組を見ていた。

この教室には50人近くの学生がいる。

そう簡単に井上…つまり 私が見つかるとは思えない。

しかし 女が井上と言った時から チラチラと学生たちが私を見つめ始めた。

前に座っていた3人組の学生なんて 体を後ろにまで向けて 私を見ている。

やばい バレる。

そう思ったとき すでに遅し。 女と目があつた。

「ちょっと来てくれない？」

女がそう言つと 他の4人が私のほうに向かってくる。

井上って 何かしたの？

ええ？知らないの？KIYOSHIと付き合ってるらしいよ？

ああ KIYOSHIファンって熱狂的な人多いよなあ。

そうそう コンサートとの帰りとかさあ 必ずケンカあるらしいよ

？しかも女同士で。

知らない。そんな情報全く知らない。

予想してなかった出来事に 私の体は動かない。

4人の女の1人が がつつりと私の手首をつかんだ。

もう 逃げられない。

「ちょっと来なよ。」

鼻にピアスをして 少しだけふくよかで もしかしてプロレスして
る？みたいな女が ギュツと手に力を入れ私の手首を締め付ける。

私は 怖さで瞳をウルウルさせるが 女たちは全くもって無視。
グイグイと手首をひっぱられ 教室を出た。

廊下には講義が終わって たくさんの学生たちがいる。

たくさんいるため 私が拉致されていることに気づかない。

手首を強く握られて 顔を下に向けているのに

誰も 私の恐怖に気づいてくれない。

バーゲン会場のように みんな自分たちのことに夢中で 他人のこ
となんて見れないのだ。

私は俯いた顔を 少しだけ上げて前で歩く女たちを見る。

女たちは お互いの顔を見つめ 口をポソポソと動かす。

その口の動きに合わせて 自分なりに考えた台詞を入れてみる。

「こいつ どうします？」

「とりあえず大学の裏に行こうか？」

「いいっすね？殴りたい放題ですね？」

「ボコボコにして そのまま焼却炉にポイとか？」

タイミングよく 女たちがクスクス笑う。

ああ 私の命は今日までだ。

私は 頭を下げる。すると女のお尻ポケットが視界に映る。
携帯ストラップが飛び出していた。

KIYOSHIと名前が書かれたストラップ。

どうやら 女たちは本当にKIYOSHIのファンだ。
そうだな。

私みたいなKIYOSHIの顔も知らない女が KIYOSHIが
彼氏になったって言われたら腹立つよなあ。

一般人の虎之助に彼女が出来ただけで すごく腹立つんだ。

それに KIYOSHIの恋人が一般人で どこにでもいるような
女だけに よけい腹が立つだろう。

殴られて ボコボコにされて 焼却炉に捨てられても仕方ない。
てか 本当に私殴られるの？

今日は 夜からKIYOSHIの家に行けるのに

今日は いろんな初めてをKIYOSHIにあげるつもりでいるのに
私の恋愛量 全く使わないまま 私は燃やされるの？

こんななら 早く彼氏作っておけばよかった。

虎之助なんかの約束を守るんじゃないかった。

後悔 後悔 後悔…

頭には 後悔という言葉しか生まれず 埋もれた。

「絵美？どこ行くの？」

私の予想通り 校舎の裏出口に向かっている時だった。

イチゴオレを飲んでいる虎之助に会った。

ああ こいつ。

こういう時には 必ず現れる男なんだよな。

そして必ず 私を助けてくれる。

だから いつも好きになっちゃってしまうんだ。

「虎之助え。」

私は名前を呼ぶと ボロボロと涙を流す。

虎之助は私の表情と ガツンと掴まれた手首を見て 今の状況を察
した。

「お前ら 何なの？絵美の何？」

プロレスラーみたいな女が軽く舌打ちをした。そして手首から手が
離れる。

これで助かる。

私は トボトボと歩き 虎之助の横に立った。

虎之助はチューチューとイチゴオレを飲みながら 女たちを睨む。

「別に。ただ K I Y O S H I と付き合ってるのか どうか知りたかっただけ。」

ウソつき。

虎之助のシャツの袖をギュツと掴む。

その手は震えていた。だって私 もう少しで殺されるところだった。

「ふうん。そうなんだ。それで裏口向かうんだ。」

プロレスラーみたいな女が また舌打ちをする。

「そ そうよ。だって みんなに知られたら困るじゃん。井上さんのこと思っで…」

「絵美のこと思っで？ だったらさあ 裏口とか複数で行くなよ？ 絵美怖がつてるじゃん。」

虎之助はそう言っで 飲んでいたイチゴオレを口から離すと 思いつきり床に叩き落とした。

バン！！と牛乳パックのイチゴオレは鳴り ペシャンコになった。

「オレ 絵美に何かあったら マジでキレルよ？」

女たちは お互いの顔を見合すと そのまま顔を下げて 私たちから離れた。

2日目 a c t . 3

太陽がこんなに眩しく感じたのは初めてだ。

私 今無傷で生きてる。助かったんだ。

ベンチに座り ただ空を見て瞳を潤ます。

まるでリストラして第2の人生を見つけたサラリーマンみたいだ。

「イチゴオレで良かった？」

近くの購買で また買ってきたイチゴオレを 私に渡す。

やばい。

バックに太陽がいるせいか 虎之助がさらに輝いて見える。

「ありがとう。」

イチゴオレ買ってくれて。

そして 助けてくれて。

2つの意味のありがとうがあることを 虎之助は気づいただろうか。
うむ。と深くうなずくと 私の隣にどっしりと座る。

そして 自分の鼻を触る。

照れ隠しをしているところから見ると どうやら気づいてるみたいだ。
さっそくイチゴオレを飲む。

相変わらず とても甘くて でも優しいピンク色の味。

虎之助の味だ。

「でさ 実際どうなの？」

チュルチュルと飲んでいたのが突然ズツとなった。

私は2 3回咳をする。

「どうなのって何が？」

「いや 本当にさあ。K I Y O S H Iと付き合ってるのかなあって
正直 ウソだったらやってられないじゃん。あんな女たちに絡まれ
てさあ。」

「はあ？あんだ まだ疑ってるの？」

「えっ？だって絵美にK I Y O S H Iだぜ。なんか豚に真珠みたい

な？いや 違う。

絵美が豚って意味じゃなくて…なんていうか不釣り合い？」

「私にKIYOSHIが合わないってこと？それともKIYOSHIに私が合わないってこと？」

「ははは そんなの言わなくてもわかるだろう？」

「はあああ？」

思いつきり 眉毛をハの逆字にする。

「だって あのKIYOSHIだぜ。オレ めちゃくちゃ好きなんだぜ！それが絵美と付き合っているなんて…」

どうやら虎之助もKIYOSHIファンの1人 つまり あの女たちと変わらないのだ。

「何 それ。私みたいな一般人が付き合ってるのがおかしいの？一般人で しかもどこにでもいそうな女と付き合ってるのがおかしいの？」

「しかも まだ処女で男に免疫がない。」

ガツンと頭にきた。

そんな単語を虎之助から聞くななんて思わなかった。

「実際さあ お前に彼氏できたことも考えられないんだよね。お前を抱く男がいるんだあって感じ。」

オレ 絵美を女として意識したことがないから驚きなんだよね。しかも それがKIYOSHIだなんて。

KIYOSHIが絵美に魅力感じてるのかって思うし ましてやKIYOSHIが絵美抱くのかって それ考えたら笑えてきてさあ。

ジョークじゃん そんなのありえないじゃん。」

ハハハとアメリカンジョークを話すかのように 虎之助は話す。

私はダルマ落としのようにスパン スパンと頭の一部をきれいに落とされていく。

「絵美が抱かれるって…てか 抱かれるの？20歳で処女のお前が??オレだったら 超めんどろ。」

最後の1個 ダルマ落としていうなら顔の部分が 叩かれた。

でも 顔は一番大きくて重いのだ 簡単に落とされたら困る。
そう 何も残らなくなってしまうから 落とされたら困るのだ。
スクッと立ち上がり 今度は私がイチゴオレを虎之助に投げた。
中身が半分ほど入っていたので べちよつと虎之助の服が汚れた。
ちっ ダウンジャケットか。布じゃないから拭いたらすぐに汚れが
落ちてしまう。

「何するんだよ!」

「ばあああか トラの超バカ!」

虎之助に対して怒りが沸騰すると 私は虎之助のことをトラと言う。
「私はKIYOSHIと付き合ってるの!! しかも今日なんてねえ

KIYOSHIのマンションに行くんだから!お

泊りするんだからね!だから リズリサのワンピースをこれから買
って 下着も白の勝負下着買って

KIYOSHIにニャンニャンしてもらうんだから!!」

ニャンニャンって…

でも 抱かれるとか ましてやSEXやHなんて単語口に出せない。
それはそうだ。私 まだ処女ですから。恋愛レベルは中学生並なん
ですから。

でも ニャンニャンはオヤジレベルだろう。いや オヤジに言っ
ても「今どき?」と言われるだろうか。

「なんだよ!自分は 相模にニャンニャンしてもらってるからって
調子こきやがって。

いいさ 私だつてすぐにトラと同じ位置に立つんだからな!」

覚えてろよ!!

そう吐き捨てると 私は虎之助に背を向けた。

そして 今日着る洋服を買うために 校舎を出た。

2日目 a c t ・ 4

【今日は マジで言いすぎた。

KIYOSHIと付き合ってることに 腹立ってしまっ...

許して 絵美様

トラ】

「KIYOSHIじゃなくて 私にやきもちかよー!」

何の迷いもなく 虎之助からのメールを削除する。

「トラのバカ。」

15畳もあるリビングに立ち ポツリと呟く。

広すぎるKIYOSHIの部屋。

私は どこにいていいのか分らず 窓辺にべったりと背中をくっつけ立ち尽くしている。

真白なフリルいっぱいワンピースは 黒色で統一されたKIYOSH Iの部屋によく映える。

映えすぎて 浮いているように見える。

そう 浮きすぎているのだ。

突然彼氏ができ それがKIYOSHIで ベンツの車に乗ったり いかにもな高級マンションにいたりしている。

それが 一般人でましてや 恋愛経験がない処女の私には 浮きすぎるのだ。

突然魔法をかけられて 王子さまと結婚したシンデレラだって

それなりの苦勞があつて王子様に会えるのに

全くの苦勞しらずなわけではないけど 周りと同じ苦勞をして生きてきた私が 幸せになれていいのだろうか。

ただ 誰とも付き合ったことがなくて 20歳にもなって処女で可哀想だから 幸せになれるでいいのだろうか？

いやいや それはかなりキツイですよ？20歳で彼氏なして 相
当かわいそうですよ。

えっ 可愛いそうなの？

だってねえ…キスもしたことないんでしょう？それ ひくし。

えっ ひくの？

男ならねえ…ひくでしょう？ほら 虎之助も言ってたじゃない？

抱かれるの？20歳で処女のお前が？？オレだったら超めんどろ。

こつんと頭を窓にぶつける。

すごく効いたわ この言葉。

つまり 虎之助は私を抱けないってことでしょうか？

自分で約束作っておいて じゃあ私が21歳になったら 処女ごめん！って言われるんでしょう。

ありえないし。

私の今までなんだったの？

虎之助が好きで 大好きだから 彼氏作らず約束守っていたのに。

瞳から涙が流れた。

私 今日泣きすぎじゃない？というか昨日から ずっと泣いていない？

彼氏出来たのに 結局 虎之助に振り回されて泣いていない？

全然幸せ実感してないんじゃない？それって どのなの？

つまりはさあ 私は虎之助と付き合わなければ 誰と付き合っても泣くんじゃないの？

「何泣いてるの？どうしたの？」

KIYOSHIが帰ってきた。

うす明りで 窓辺に立ったまま泣く私。

「電気つけばいいのに こんな暗い部屋。」

やはり まっ黒部屋には 真っ白な私は浮きすぎてるのだ。

KIYOSHIだって思ってるはず。

彼女にしたものの こいつ浮きすぎだろう？と思ってるはず。

天使が彼氏にしてくれたけど

KIYOSHIは心の底ではきつと こいつとなんで付き合ってるんだろうつて思ってる。

「エミちゃん泣くなよ。」

KIYOSHIは真っ黒のコートを着たまま 私に近寄り人差し指で涙を拭いてくれた。

「ごめん 仕事遅くて寂しかったんだよな。ごめんなあ。」

的外れの謝り。KIYOSHIの瞳も濡れていて 今にも泣きそう
だ。

「違うよ。」

「違うって？」

「KIYOSHIが今まで付き合った彼女の中で 私が一番浮いて
るでしょう？」

「えっ？何それ？」

「私 KIYOSHIが初めての彼氏なの。つまり20歳なのに
キスもしたことなくて まだ処女なの。」

これってひどいでしょう？なんかもう この女おかしいって感じてし
ょう？面倒って感じてしょう？」

「エミちゃん……」

突然の告白をしても KIYOSHIの指先は暖かく 次々流れて
くる涙を拭いてくれる。

KIYOSHIと出会ってまだ2日。時間にしたら 1日も満たな
い。

でもわかる。この人は とても優しい人だ。虎之助よりも優しくて
私よりずっと大人だ。

だからこそ こんな女は面倒だろうし 彼女にしたことも後悔する
だろう。

天使が言ったのは 好きな人と付き合わせてあげる だ。

今 私はKIYOSHIと付き合っている。だから 願いは叶った。
別れるも続けるも 私たち次第なのだ。

つまり今 KIYOSHIが別れようと言えば THE END。

「面倒って 誰かに言われたのか？」

「今日 トモダチに言われた。オレだったら超めんどうだって。」

KIYOSHIの手がぴたと止まった。

「それ 男ともだち？」

「うん…幼稚園からの幼馴染。」

「そうか…」

頬に触れていた手が離れる。

ああ もう終わりだ。頭にはエンドロールが流れる。

「絵美は オレよりそいつのほうが好きなの？」

絵美と呼び捨てされ ドクリと心臓が鳴った。

KIYOSHIは視線を下にして 自分の額と私の額をくっつけた。
KIYOSHIの熱が私に伝わり 体全体が火傷したように熱くなる。

心臓は ドクリドクリと鳴り続けてる。

「オレ ちょっとシヨックだね。絵美がオレ以外の男と そういう話をするの。」

口が動くたびに息が 私の鼻の天辺に触れる。

今までタバコを吸っていたのだろうか。息は生暖かく煙の臭いがすごくした。

私の周りでタバコを吸う人なんていなかったから その息はKIYOSHIの特別なものとなる。

「というより オレには言わなくて そいつには話してたんだ。」
今 KIYOSHIは虎之助にやいている。

その言葉が頭には浮かぶけれど 理解できない。

だって あのKIYOSHIが だ。あの虎之助にやいてるの だ。
しかも私を相手に だ。

ウソでしょう？

額をぴったりとくっつけられて 鼻には息があてられて KIYOSHIは私にやいていて…

そんな嬉しいことがあっていいのだろうか？

「オレ 絵美のこと好きだよ。」

1度と聞くことがないと思った台詞を KIYOSHIはさらっと

言い額を離す。

少だけ瞳を赤色に染めて 私を見つめるKIYOSHI。
切れ目で怖い印象を持つ視線なのに 今はとても暖かく見える。
この瞬間を 写真に撮りたい。

私を愛しく思ってる この顔を焼き付けていたい。
虎之助に見せてやりたい。

私とKIYOSHIはこんなにも思い合ってるってことを。

「他の奴が言ってることなんて信じるなよ。」

頭に浮かんでいたエンドロールは すっぱりと消した。

そして エピローグを浮かべる。

そう これからなんだ。

これから 私とKIYOSHIの物語が始まるのだ。

「ごめん。もうKIYOAHIの言葉以外信じない。」

あまあまの台詞を言うと KIYOSHIは鼻から息を出す。

そして そのまま私を抱きしめた。

KIYOSHIの両腕に包まれた私。

もちろん 男の人に抱き締められるなんて初めての経験。

でも なぜだろう。

心臓のドクリはなく トクントクンと正常な音が鳴っている。

安心する。

私はやっと 全てをあげる人が出来たんだって安心する。

私の両手が KIYOSHIの体をつつむ。

3日前まで この両手がつつむのは虎之助だと思っていた。

もちろん KIYOSHIをつつむなんて 1ミリも想像していなかった。

でも今 私はKIYOSHIをつつんでる。

後悔なんてしない。

だって 変わらないもん。

私は ずっと自分の好きな人をつつみたいと思っていたから。

私は今 KIYOSHIを好きなんだ。

そう思っ
たら
また
涙が流れてきた。

3日目 a c t : 1

やった。やりました。

私 井上絵美は20歳にして

初めて彼氏ができ そしてキスもSEXもすることができました。

しかも 相手はKIYOSHIです。

めちゃくちゃ良い男で めちゃくちゃ優しい男とすることができました。

もう 神様に感謝です。

もしこれが 今まで恋愛をしていなかったからだと言つなら

本当 そこその男と付き合いなくて良かったなあと思います。

中学の時に少しだけモテていた時期がありました。

と言つても そこそこ人気者だった男子に好かれていただけなんですけど

周りが良いっていうなら付き合いおうかなあ 虎之助は全く異性に思つてくれないし

そう思つて 付き合いおうか思つたけど 付き合いなくて良かったです。

本当 今まで恋愛しなくて良かった。

ありがとう 神様。

いや この場合はあの天使だろう。

ありがとう 天使。KIYOSHIを彼氏にしてくれて!!

これから私は ずっと ずっと KIOSHIを好きでいます! 2人で幸せになります。

「ちよつとまちいな エミちゃん。」

あれ?天使の声が聞こえる。

「僕 言つたよね。エミちゃんは1週間しか 好きな人と付き合いえんつて。」

えっ 1週間?

「そう1週間だけやって言っただやん。覚えてないん？」

そうかあ 1週間だけか…

えっじゃあ KIYOSHIと付き合って3日目ってことは…

「後4日間だけじゃん。」

ガバッと起き上った。

心臓がドクドクと言っている。

あと4日だけって 今日過ぎたら半分は終わってしまう。

私とKIYOSHIの恋愛は あと4日間の命。

「まじかよ。」

溜息と一緒に言葉を吐き出す。

瞳を瞑り また寝転がる。

フワフワのベッドは気持ちいい。毎日洗たくでもしているのだろうか？

いや KIYOSHIは毎日仕事で忙しいんだから クリーニング屋さんでも来てるのだろうか。

私は顔を左に向けた。

目の前にはKIYOSHIの寝顔がある。

あんなにも私が騒いだのに KIYOSHIは全く気付かず。肩で呼吸をして寝ている。

私 KIYOSHIとしたんだ。

改めて確認すると お腹がくすぐったくなり笑顔がこぼれる。

KIYOSHIはやっぱり優しくて 何度も頭を撫でてくれたりキスをしてくれた。

不安そうな顔を私がすると 少しだけ眉間を緩めて笑ってくれた。きっと虎之助だったら こんなに優しくはなかったと思う。

そう思ったとき 虎之助と中断していたメールが気になった。

今まで 謝りのメールに関しては全て返信していたのだ。

KIYOSHIが起きないように 私はゆっくりとベッドから離れる。

そして床に落ちていたワンピースを拾い それを着る。

窓辺に捨ててあるケータイを拾い 画面に明かりをつける。

着信10件 メール3通

全部が虎之助だった。かなり心配してるなあ。

そう思いながらも 私は電話をするつもりどころかメールの内容も見つもらなかった。

「おはよう 絵美。」

朝から聞こえるKIYOSHIの声は 目覚まし時計の声とは比べ物にならない。

体中が ぱっちり目覚める。

「おはよう 潔。」

潔は 瞳を一にしたまま でも口は横に伸ばしたまま。

「かわいいな そのワンピース。絵美は白が似合うよ。」

朝からストロベリーのような甘い言葉を言われ 私は照れ笑いをする。

そして 虎之助に1通のメールを送った。

【私は今 潔と付き合ってるの。

潔は 私を好きだと言ってくれてる。それだけを信じたい。

エミ】

後 4日間。

私の恋愛量 全てを潔にささげたい。

3日目 act・2

学校に行ったのは午後。

最悪なことに 虎之助と同じ講義だった。

「なあ 本当に悪かったって。」

私が教室に入るなり 虎之助はべったりとくつついてきた。もちろん 席も隣に座る。ついでに 虎之助の隣は相模だ。

「ねえ トラ。井上さんに何したの？」

オレ 絵美が処女だということを 超めんどろと言いました。なんてことを彼女に言えるわけがない。

ちよっとな。

虎之助はそう言っただけで相模に笑った。

本当に こいつは最低だ。

だいたい彼女に言っただけでいいってことは 自分でも気づいてるじゃん。この言葉言ったら嫌われるって。

それを私には言っただけだ。私には嫌われて良いってことなのか？

考えるだけイライラして 頭が煮えそう。

ちよつと絵美 落ち着きなさい。頭冷ましてよ。あんたついさっきまで誰といたの。

潔といました。しかも 大学まで潔が送ってくれました。

そう。だから 虎之助のことでイライラしても意味ないでしょう。

変なところで気力使わないの。

そうだよ。私には潔がいるし。

口元が自然と緩む。私は今 笑顔を自然と作れている。

「気にしないで。もう どうでもいいことだから。」

私がそう言っただけで 虎之助は口を鰹のようにパクパクとする。

「どうでもいいって…許すの？」

はあ なんなの？許してほしくないのか！ピンクが欲しいのか？ピンクが？

「うん いいよ。私も返信しなくて悪かったし。」

心裏腹 ニコニコと笑いながら返事をする。

笑顔を作っている私の異変に もちろん虎之助は気づいている。

けれど 私自身がいんだと言っているのだ。他に言葉が見つからず 虎之助は見つめ続ける。

「もういいじゃん トラ。井上さん許してくれたんだから。」

あまりにも見つめる時間が長かったからか 相模が声を大きくして言った。

固まっていた虎之助の顔が動き 相模を見つめた。

「あ ああ。」

「それよりさあ。今日 授業終わったら どこ遊びに行こうか？トラ 行きたいところある？」

「いや 別じゃないよ。和泉が行きたいところでいいよ。」

トラ 和泉か。

いつの間にやら 2人名前で呼び合っちゃってさ。

昨日の私なら くそっ相模め！！と怒っていたかも知れない。

でも 今は全く気にならない。お2人もお幸せに♪なんて思ってしまう。

鞆に入れていたケータイが バイブでメール着信を教えてくれる。

私は ケータイを取り出し画面を見る。

【これから 仕事。

明日夕方にならないと 会えない。

寂しいけど がんばるよ。

潔】

思わず自然な笑顔を作る。

虎之助は その表情をチラリと盗見をしている。

けれど 私は全く気付かずに返信を送る。

【そうか。私もさみしいよ。

けれども しょうがない。

仕事 無理しない程度に頑張って。応援してるよ。

エミ】

今日は 会えないか…

ってことは 明日いれて3日間か。

1回でもいいから1日フリーの日がないかなあ。

そしたら デートしたいな。ドライブとかしたいし。

潔とのデートプランを考えて ニヤニヤ笑っていると またケータイが震える。

と 同時に 講師が教室に入ってくる。

私は 慌ててメールを確認して ケータイをしまう。

【絵美 大好きだよ

潔】

やばい。

あんなメール見たら 私はこの講義ずつと笑顔になってしまふ。

大好きだよ。 って 潔から大好きだよって。

すでに 笑顔固定になっている顔に虎之助はポツリと呟く。

「今日 お前ワンピース着てるんだな。もしかして K I Y O S H I の家からそのまま来たの？」

私は一瞬だけ虎之助を見て こくりと頷いた。

「へえー でっとうだった？」

授業が始まっても虎之助は話しかける。

「どうだったて何が？」

ボソつというと虎之助もボソつと答える。

「K I Y O S H I の反応だよ。お前のこと知ってめんどろって言わなかった？」

穏やかな。

そう穏やかな雰囲気が一瞬にして大火事となる。

私の理性が一瞬にして爆発した。

パチン！！！！いやパチン！！！！か。

とにかく 虎之助の頬を叩いた音が教室中に響いた。
相模は 「きやつ」と悲鳴を上げた。

何事だ！？

教卓で出席をとっていた講師は 周りをキョロキョロしていた。

「ばあああか 本当に最低！死ね！トラなんて死ね！！」

私は 心の奥からそう叫び 教室を出た。

やばい。この講義 必須の講義なのに欠席してしまった。

4日目

虎之助からメールは1通も来ない。

これで15年以上の付き合いが終わりとなったのだ。

別に良いけど。私には潔がいるし。

今日だって これから潔が家まで車で迎えに来てくれるし。またお泊りするし。

私は 虎之助から言われた数々の失言を思い出しては蚊が刺さったかのように無視をし 鼻歌を歌いながら 潔の迎えを待っている。

時間は19時50分。

メールでは20時までには行きたいって言ってたから もうすぐ来るはずだ。

最後の確認として 全身が見える鏡の前に立つ。

もちろん 以前と同じ格好はしていない。

でも 白のワンピースを喜んでくれたから 安いけど白のキャミワンピースを買った。

それを着て ダウンジャケットを羽織る。

薄着かも知れないけど いいんだ。

だって潔が暖めてくれるから

自分で浮かばせた言葉なのに 沸騰するほどに照れてしまう。

そして 確信する。

私は今 潔で染められているのだ。

他に余裕がないほどに 潔で染まっているのだ。

潔が大好きなのだ。

「大丈夫？」

鏡に映っている私が呟く。

何が大丈夫なの？

「だって 後3日で元通りだよ。」

知ってるよ。

「潔はK I Y O S H Iになるんだよ。たぶん…いや絶対に 私には振り向いてくれない。」

泣きだしそうな顔で鏡の私は呟く。

うん。そうだね。

でもいいの。でもいいんだよ。

「大丈夫!!」

大きな声で言う。鏡の私は少しだけ笑ってくれた。
でも 力なくした瞳が言っていた。

そう思ってるだけで 大丈夫じゃないよね？

ポーンポーンとインターホンが鳴った。

潔が迎えに来た。

鏡の私に気の抜けた笑顔を作ると 私は部屋を出た。

鏡の私はポツリと呟く。

「今を楽しみなよ 私。」

玄関を出ると 潔が待っていた。

「ごめんなさい 突然来ちゃって。」

修正。

玄関を出ると 相模が待っていた。

ウサギみたいに瞳を赤くして 私を見つめていた。

虎之助とケンカをしたな。

「何？私 これからデートなんですけど。」

相模を睨みつける。

「あの その 昨日トラと井上さんケンカしたよね？」

それから トラずっと機嫌悪くて…だから 仲直りして欲しいなあ
って思ってた…」

はあ？

私は言葉を見失い 睨んでいた瞳の力を無くす。

今 すごくすごく相模の言葉が理解できないんですけど。

全く言葉を出さない私に 相模は焦ったのか
自分でトークショーを始める。

「だってね 昨日から本当にトラおかしくて。何言っても ああ
か そう しか言わなくて。」

今日も一緒に遊んでいたけど やっぱり言葉なくて…私が怒ったら
逆に怒られて それでケンカしちゃって…」

ケンカの情景が相模の頭の中で映し出されているのか 相模は突然
泣き出した。

「ほんとう…なんか 私と付き合ってもトラは 絵美はな 絵美は
な って井上さんの名前ばかり。」

私のこと好きだって言ってくれても キスしてもHしても なんか
心は私を好きだって言うてくれない気がしてて…

井上さんに彼氏できて これで私を好きになってくれると思ったの
に…なんか… もう…」

ポタポタと涙を流す相模。

けれど 私は潔のように優しく涙を拭きとることはできなかった。

虎之助

あいつ 何考えてるの？

今さら遅いんだよ。

こんな情報 今さら聞きたくないんだよ。

「なんで 私 すごく頑張って勇気出して トラに告白したのに…
なんで 井上さんなの。」

私 頑張ってるのに なんで 井上さんなの？」

井上さんは トラに何をしたの？

その言葉は 泣きの嗚咽で聞き取りにくかったのに
私の中で 一番心に響いた気がする。

そして 高校時代の友人が言う。

「ただ 恋愛量があっても自分から使わないと駄目だよ。つまり恋
愛は行動力が大切なんだよ！」

あの子 担任と不倫していたけど

自分からそれでも良いから付き合つてと言つたのだろうか？

私は 今まで 虎之助との約束を待つてばかりで 自分から行動したのだろうか？

「絵美？」

潔の声がした。

私は180度体を動かして 数メートル先にいる潔を見る。

私 潔と付き合つたのも自分からの行動だったわけ？

いや違う。天使がくれたものだ。

私は何もしていない。何もしていないのに 潔が彼氏になってくれた。

潔から見て 私の表情はどうだったのだろうか。

緩んでいた潔の顔がガチガチになり 私の元へ来る。

相模は泣き 鳴咽をし 顔を下げたまま。

これって 私が彼女泣かしてるみたいじゃん。

だって私 真顔だし 潔もケンカしたんだと思うよな。

潔には あまり虎之助のこと言いたくないのに…

私は 頭の中でこの状況の言い訳を考えていたけれど

結局は 相模が言つた 何をしたの？ と

高校時代の友人が言つた 恋愛は行動力 と言う言葉が

マールのように混ざりに混ざつて 混乱させた。

私 何もしてないのに 潔と付き合つていていいのだろうか？

潔は右腕を差し出し 私の左腕に絡めてきた。

「絵美になにした？」

私 泣いても怒つてもなかった。

瞳も 顔も赤くしていなかったけど 表情は真顔だったかもしれないけど

悲しかった 不安だった。

それに潔は気づいてくれた。強く絡まつた腕が教えてくれた。

私は それが嬉しかった。

だって 男なんて泣いてる女を被害者だと思つるのが当然だと思つた

から。

虎之助だったら絶対 私を悪者に使っていたと思う。けれど潔は違った。

「これから 絵美とデートだから 悪いけど帰ってくれない。」
ずっと嗚咽を続ける相模の顔が上がる。

涙で目を囲んでいたアイライナーが崩れ パンダみたいになっていた。

そんなパンダの瞳に映し出されたのは
潔と腕を組む私。1組の幸せなカップルだ。

「すいません…ただ私 井上さんが羨ましくて…幼馴染だけで
トラが大切にしてる…」

「もうやめてよ。」

声が少しだけ裏返った気がする。

「わかったから だからお願い 帰って。私は今 潔とデートしたいの。虎之助の話は聞きたくないから。」

台詞を遮られた相模は しばらく口を開けたままだったけど

私が虎之助に興味がないことを理解したのか 下くちびるを噛みしめると 深く頭を下げた。

「すいません おじやまして。」

それだけ言っと 私たちに背を向けて トボトボと歩いて行った。

相模は これから虎之助と仲良くなれるのかな？

私は 仲良くなって欲しいと思ってるのかな？

それとも このまま別れてほしいと思ってるのかな？

私は 強く潔の腕を絡めた。

「大丈夫 絵美？」

潔は 左手で私の頭を撫でてくれた。

私は潔の顔を見る。

潔は これから捨てられるんじゃないかという不安気な顔で私を見る。

さきほど見た相模と同じ表情に見えた。

「大丈夫だよ！ありがとう 潔。」
相模みたいな不安はなくていい。
虎之助は 私のことどう思っているか知らないけれど
私が今好きなのは 潔なんだから。
そう 虎之助がどう思っているかも…
鏡の私が呟いた言葉が頭に響く。
今を楽しみなよ 私。

【絵美 本気で怒ってるよな？
マジで悪かった 反省してます。
とにかく絵美の声聞きたい！
トラ】

【もしかして 今 K I Y O S H I のところにいるのか？
オレ 邪魔してる？
でも 本当にあやまりたいから 電話ちょうだい！
トラ】

【オレ お前に彼氏が出来たなんて 嫌だよ。
認めたくない。
トラ】

虎之助から送られてきた未読メール3通。
1日経った今 見直してみる。
そして 迷わずメールを消去する。
見たメールをいちいち消去しているわけではないけど
でも このメールは取って置きたくはなくて 未梢したくて消去し
た。

お願い 虎之助。
もう 私の所に入ってきて来ないで。
ケータイを額につけて そう願った。
私の耳元には 潔の寝息が聞こえる。
私はケータイの画面を見て 時間をカウントする。

今 23時59分55秒。
56
57
58
59
あと2日だ。

5日目 act・1

中学の時に少しだけモテていた時期がありました。

と言っても そこそこ人気者だった男子に好かれていただけなんですけど

周りが良いっていうなら付き合おうかなあ 虎之助は全く異性に思ってくれないし

そう思っ 付き合おうか思っ たけど 付き合わなかった。

私は やっぱ虎之助が好きだから。

幼稚園の頃 好きだった先生に失恋して っただだ奥さんいたのを知って

泣きまくる私にもらい泣きしながら 頭を撫でてくれた時から虎之助が好きだから。

でも 好きになってくれた 男子は全く諦めてくれなくて

「付き合ってる奴いないなら オレと付き合っ てよ。」

っ て 電話でもメールでも会話でもしっこく言われて

それを嫌がっ て 男子を無視してたら 男子を好きな女子たちに呼ばれた。

あんた調子乗りすぎ！！

そう言われて 墨汁入った水風船投げられて 制服を墨色に染められた。

私じゃなくて 虎之助が。

ヒーローみたいに 水風船を投げられた直後に現れて 私の盾となってくれた。

「あのなあ こいつレズなの！男に興味ないんだって！こんなことしてると お前らが狙われるぞ！こいつレズでMでもあるんだからな！！」

最悪なウソを虎之助は言っ て 私を助けてくれた。

ええ 男子のしっこさもなくなり 女子たちは近寄らなくなりました

た。

私 このまま一生彼氏出来なかったら トラのせいだからね！
はいはい。お前が21歳になっても 1回も彼氏作らなかったら
オレが責任もって 一生面倒みますよ！

本当？

まじまじ 約束するわ。

「懐かしいよなあ。」

今から8年ほど前の出来事を思いだし 虎之助はポツリと呟く。

「お前は覚えてた？」

覚えてるわ。

私 潔に会うまで1秒でも忘れたことなかった。

そして この約束を守ってもらおうと 彼氏を作らずにいた。

「オレ お前が今まで彼氏作らないのって これが原因だって 調子に乗ってた。」

なんで今さら この話をするんだろう。

【今の講義終わったら この前イチゴオレ投げつけた場所で会わない？

エミ】

別に 虎之助から昔の話を掘り上げてもらおうとしたわけではない。
相模の号泣に責任を感じて 虎之助に会って仲直りというか 普通の
頃に返ろうとしたただけだ。

私は 潔が大好きで潔以外は考えられない。だから 虎之助の恋愛
をこっちに持ってこないで。

私がビシッとそう言うのと 虎之助は真顔でコクンと頷き 昔の話を
しだした。

「別に虎之助が原因で彼氏作らなかったわけじゃないし……」

私は 見栄を張ってウソをつく。

「それに実際 今は潔と付き合ってるし。」

「そうだよなあ。」

虎之助が初めて 私と潔の交際を認めた。

「お前 潔と付き合ってるんだもんな。しかも 超ラブラブ。」

「うん…信じられない？」

私は 虎之助の横顔を見る。

いつもなら 緊張してドクドク鳴る心臓も 今は正常にトクントクンと鳴っている。

虎之助は一瞬私と視線を合わせると視線を外し

「いんや 信じる。お前は潔と両想いだ！」

自分に言い聞かせるように大声で言った。

そして 頭を大きく下げて

「本当 今までのことごめん！オレ どうかしてた！本当にごめん！！！」

そう謝った。

私は鼻から息を吸い 息を出す。

これで もう虎之助に悔いはない。

私は 虎之助の襟足を見つめながら

虎之助にあった好きと言う気持ちが なくなったのを確認した。

だって 虎之助を見てもときめかないし

虎之助が言っていた オレ どうかしていた！ っていう気持ちを
知りたいと思わない。

ただ 潔との交際だけは認めてほしかった。

その気持ちだけが存在していた。

「もういいよ。これからはお互い恋人大切にしないとね。」

私はそう言って 虎之助の肩に触れた。

アルコールを飲んで酔わなければ 触れなかった虎之助の肩。

今はしらふで 緊張もせずに触れらる。

これで私にとって虎之助は 好きな人から友人へと変わったんだ。
そう確信して 私は強く虎之助の肩を掴む。

「ほーら もういいから頭上げて。」

だけど 虎之助は頭を上げてくれなかった。

私は気づく。虎之助の肩が震えていた。

虎之助 まさか泣いてる？

そう思ったのと同時に

お願いだから私の所に来ないで
と強く願う。

虎之助は 震えた声で言う。

「お前 本当に彼氏作ってたんだな。」

虎之助は 私の中に入り出て行ってはくれなかった。

5日目 act・2

【ごめん 突然泣き出して
また明日会わない？

明日じゃなくてもいい いつでもいいから絵美に会いたい。
トラ】

今更 どうしろと言うのだろうか？

私には潔がいて 虎之助には相模がいるのに

私は潔のマンションで 虎之助のメールを漠然と見つめていた。

潔は まだ帰ってきていない。

42インチのバカでかいプラスマテレビには 潔が歌を歌っている。
潔と一緒になのは 後2日だ。

2日経てば 潔はテレビの世界の人となる。

でも 虎之助はどうなんだろう？

2日経つても 1週間経つても 1か月経つても
きつと何年経つても 私の世界に彼は存在するのだ。

一瞬だけの潔。何年もいる虎之助。

私が求めるのは どっち？

ケータイの画面もテレビの画面も見れなくなった私は
頭を下げて テーブルに目を向けた。

テレビと同じ大きさの黒のローテーブル。

そこには 食器やグラスなど食事をした痕跡はなく

なぐり書きされた文や音符が書かれた ルーズリーフが散乱してい
た。

ここで 潔は作詞作曲しているのかな。

今までは 潔の部屋にすることだけで 舞い上がって緊張していたが
今は もう自分の部屋の一部化している。

私は 一番上に乗せてあるルーズリーフを取る。

君と離れたくない

側にいたい

永遠

断片的に書かれた単語が どうやって歌詞になるのか分らない。
潔って言う台詞も甘いからなあ。

今度はいつたい どんな曲が出来るのだろうか？

私の思い出も入っているのだろうか？

少しだけ口元を緩ますと 私はそのルーズリーフを戻そうとテープ
ルを見る。

さきほども言っただけで たくさんあるルーズリーフ。

けれど 1枚だけ桜色をした紙があるのに気づく。

何が書かれているんだろう。

桜色の紙を取り出す。

かなり下の方に入っていたため 取り出すと他のルーズリーフがテ
ーブルから沢山落ちた。

つまりは だいぶ前に書かれた紙。

私は その紙を読む。

―― 潔へ

今日も仕事一緒だね。

あたしはいつたん家に帰ってから TV局に行くから

また 番組で会おうね。

あたしのための歌 生で聞かせてね。

あたしも潔のために 歌うから。

紫音より――

私の体は当然固まる。

潔には女がいたんだ。

でも 紫音って一体誰？

「次は 紫音でREAL LOVEです。どうぞ！」

テレビから この文を書いた持ち主の名が聞こえた。

テレビの大画面に映し出された女の顔を見る。

真っ黒な長い髪にクリツとした大きな瞳を持った女だった。

私は 彼女の歌声を ただ聴いていた。
手に持っていた桜色の紙が震えていた。

潔は 数秒だけ沈黙を作り

「ああ 付き合ってた。」

と言った。

やっぱり そうだよな。

俯いて言葉を失う私。

「だけど 今は関係ないよ。確かに 彼女は歌手だから同じ場所にいるけど。」

潔は私の右の掌を拾う。

「今は絵美がオレの中で一番近くの場所にいるよ。だから気にするな。」

掌にキスをする。

私はお姫様になった気分になる。もちろん潔のお姫様だ。

でも 私はどうしても確認しなくてはいけない。

「ねえ潔。」

「うん？」

「紫音さんとは いつ別れたの？」

私が紫音の名を出すと 潔は少しだけ瞳を細める。

「いつって…それ聞いてどうするの？」

「もしかして 私と付き合い始めてから別れたんじゃない？私が原因で別れたんじゃない？」

「お前が原因なわけないだろう！」

潔は怒鳴ると 私を抱きしめた。

左手で持っていた桜色の紙が落ちていく。

「絵美は関係ないよ。これはオレと紫音の問題だ。お前が責任感じるなよ。」

潔は今までで一番強く私を抱きしめてくれた。
耳から直に聞こえる潔の声が

鼻から直に入ってくる潔の匂いが

私の心を強く締め付ける。

「オレは紫音よりも絵美が好きだから　だから別れた。絵美が一番なんだよ。」

潔は更に力強く抱きしめて言う。

「だから　別れようとか言うなよ。オレは絵美とずっと一緒にいたいんだ！」

ずっと一緒って　あと2日間だけなんだよね。

そう思うと　涙は必然的に流れてくる。

私も潔に負けずと　強く握る。

5日前　なぜ　私は潔の名前を出してしまったんだろう。

潔の名前を出さなければ　こんなに　切ない思いをしなくても良かったのに。

潔のこと　こんなにも好きにならなかったのに。

5日前に言っていた天使の声が聞こえる。

「ええの？本当にKIYOSHIで。」

6日目 a c t : 1

お互いがお互い 好きだということが嫌でもわかっていて
ずつと一緒 が口癖で 仲良くやっていた。

それが突然 君よりも好きな奴ができた。と言われて別れを言われる。

あっ そうか。じゃあ しょうがないね その好きな子と仲良くね。
なんて 言える人がいるのだろうか？

普通なら 納得なんて出来るわけがなく 恋人がいる場所に行ってしまう。

潔のマンションを出たとき 入口で紫音を見つけた時

私は 驚きよりも納得の感情が生まれてしまった。

潔は 朝早くに仕事へと出て行った。

だから1人で出ていく私は このマンションの住人になりすまして

紫音の前を通り過ぎることだってできた。

わぁ 芸能人がいる！そう驚いたふりして 紫音にサインを求めて
去ることもできる。

それなのに 紫音の前に立ち止まってしまったのは

彼女があまりにもキレイすぎたのと

口を少しでも開けば 簡単に白い息が出てしまう寒い外で
震えながらも 潔を待っていたから。

こんなにも寒い外でも 頭には潔のことではいっぱいなのか 顔を固
めずに笑顔で待っていたから。

横取りして 無理やり潔の彼女になった私には 彼女が眩しすぎた。
立ち止まり 自分をみる私に 紫音は自分が歌手の紫音であること
がバレたと思い

私と目が合うと 少しだけ眉を寄せ困りながらも TV用の笑みを
私に作ってくれた。

そう 紫音は 私が潔の彼女だと思っていない。

無理もない。

私は どこにでもいる普通の女だ。

潔や紫音のように輝けるものなんて何も持っていない。

そう私には何もないのだ。

ポケットからケータイが鳴る。

潔からの電話の着信音だ。

KIYOSHIの歌が聞こえ始めると 紫音の笑顔がコマ送りのように徐々に消えた。

そして 黒い瞳孔を満月のように瞳いっぱい満たし私を見る。

私は 紫音の瞳を見つめながらケータイを取る。

そして声を出す。

「もしもし 潔？今 マンションでたよ。」

私がそう言うとき 紫音は強引にケータイを奪った。

紫音の長い爪が 私の手の甲を掠り傷が出る。

でも 紫音は私の手の傷など全く気にせず ただケータイに叫び続ける。

「潔！潔なの？なんで なんで携帯番号変えたの！？なんでなんで なんて…」

こんな女と付き合ってるの？

そう言おうとして 私を見つめ紫音は言葉を詰まらせる。

正直に言えばいいのに 私に気を使って言わない紫音。

少しだけケータイから耳を離し

「ごめんなさい。手のひらケガさせちゃった。」

申し訳ないとは思ってないのに 謝っちゃって。

本当 腹黒いな自分。

紫音は きつと いやきつとじゃない。

絶対に潔のように優しい人だ。

私は こんなに優しい2人を引き離れたんだ。

あの時 思いつきで潔の名前を言って 別れさせたんだ。

紫音？お前 絵美にケガさせたのか？

受話器からは 潔の声が聞こえる。

紫音は潔の声を聞き 涙を流す。

「あなた 絵美って言うの？ 潔の彼女なの？」

私は頷く。

紫音は瞳を閉じながらも涙を流し続ける？

おい？ 紫音？ いいから 絵美に変われよ！

潔のどなり声が 紫音の耳に届く。

つい最近 5日前までは 甘い言葉を言ってくれた潔。

紫音 お前いいかげんにしろ！！ 絵美に何かあつたら許さないからな！

それが今 私を怒鳴り 違う女の名前を言っている。

紫音は 現実能耐えきれなくなり

何も言わず そつとケータイの切ボタンを押すと

そのまましゃがみ込んだ。

私は その姿をただ見つめていた。

「なんで… なんで… 潔… 突然 こんなことになったの？」

それは私が天使に願いを叶えてもらったから。

そんなこと言つて 紫音が満足するわけがない。

私だったら 絶対ふざけるな！ と言つてビンタをする。

そう ふざけた話なのだ。

ふざけた話なのに これが現実なのだ。

そして私は このふざけた現実に必死なのだ。

「紫音。」

私が名を呼んでも 紫音は頭を下げたままだった。

「ごめん 本当にごめん。」

潔を取ってしまったって こんな ふざけたことになってしまつても

「1日だけ我慢して。 1日だけ潔の恋人でいさせて。」

震えた声で言つた言葉に現実味を感じられたのだろうか？

瞳を大きく震わせて紫音は言う。

「…いやだよ 1日でも嫌だよ。

潔とソバにいたいのに ずっとソバにいるって言ったのに 1日だって我慢できないよ!!

なんで こんなことになったの。ねえ あなたは潔に何をしたの？」

まただ 相模と同じことを紫音は言う。

何もしていない。

それが 私の答えだ。

その答えを口に出せないのは

そんなこと言って紫音が満足するなんて思っていないからだ。

「私は… ずっと潔が好きで ずっと思いを言い続けたの。それで やっと両想いになったのに。

そんなたった1日で気持ちは変わるものなの？」

変わったんじゃない。

変わらせたんだ。

天使が 私が 無理に変わらせたんだ。

胸がずっと痛い。

私は 潔と付き合うべきではなかったんだ。

そう頭で理解しても 私は潔と別れるつもりはなかった。

それでも願ってしまうんだ。

潔を好きになってしまったから 大好きになっちゃったから

お願いだから 後1日だけ潔の恋人でいさせて。

6日目 a c t . 2

数分前まで紫音が立ち尽くしていた場所で 今度は私が立ち尽くして考える。

例えば。そう例えばだ。

たださえ ばかっている話なのに さらにたとえ話を作ってみる。

あの時 天使に虎之助と付き合いと言ったら どのようなだろう？
そしたら 私は虎之助と付き合うことができる。

きつと 今の私と潔のように ラブラブで付き合うことができるんだらう。

でも 相模が泣くだらう。大泣きして 私をビシバシ叩くだらう。

私は その時どう思うんだらう？

潔の時と比べて 罪悪感を覚えないのだろうか？
関係ない。

私は同じ罪悪感を覚える。

何もしないで ばかみたいに約束守っていただけの自分に腹立つだらう。

じゃあ もし これが自分の努力だったら？

自分から頑張って 潔や虎之助に近づけたら？

それで 告白してオッケーもらえたら。

絶対に罪悪感を覚えない。

そうなんだ。

こんなにも潔を好きになって 潔も私のことを好きでいてくれても満たされず 悲しい気持ちになるのは

こんなにも相模や紫音の涙を見て すぐく胸が締め付けられるのは私が恋愛に関して 何もしていなかったら。

そう何もしていないのに 両想いになってしまっているから。
ねえ天使。

あの時 あなたは私にこう言ってくれたよね。

「だから お礼に エミちゃんの好きな男と付き合わせてあげるよ。」

「お礼って…」

私 今すごく苦しいんだよ。今まで経験したことがないくらい すごく苦しいんだよ。

天使は こうなるってことわかっていたの？

もしそうなら これはお礼なんかじゃないよね？

これは 恋愛に関して何もしなかった私への罰だよな？

何もしなかったのに 虎之助と両想いになりたいと願っていた私への罰だよな？

遠く遠く 空の向こうで微かな声が聞こえる。

「それは違うよ エミちゃん。僕は ほんまにエミちゃんにお礼したかったんだよ！」

でも僕 人間の恋愛なんてようわからんから…だから こんなことになってしまつて ほんまにごめん。」

てか私 天使にお礼されるって いったい 天使に何をしたんだろう？

もう

何が何だかわからない。

私は いったいどうなつてしまふんだろうか。

頭が真っ黒になり 何も考えなくなつたとき

ケータイのメール着信音が鳴つた。

私は カチカチに固まつた手をユツクリと動かしケータイ画面を見る。

【今日 講義つて何講時まである？

もし4 講時まであるなら それ終わつたら会わない？

お前が イチゴオレ投げつた場所で待つてる。

トラ】

ああ こいつ。

こういう時には 必ず現れる男なんだよな。

そして必ず 私を助けてくれる。
今回も私を助けてくれるの？
私は ケータイを強く握りした。

6日目 act・3

「よっイチゴオレ飲む？」

虎之助はいつものようにそう言った。

私は 口を開きっぱなしで虎之助の顔を見つめる。

「虎之助どうしたの？その頬？」

腐ったイチジクのような色が 虎之助の右頬前面に染まっていた。

「えっ ああ。わかる？昨日さあ ちょっと和泉とケンカしてさあ。」

相模。 あんなに華奢なイメージ作っておきながら 私より力があるんだなあ。

私 よく相模に殴られなかったなあ。 殴られてたら 歯の1本は確実に取れてたな。

相模の隠れた強さに驚きながら 私はイチゴオレをもらい 虎之助の横に座る。

いやあ 和泉といい絵美といい オレは女に殴られっぱなしだな。

ハハハと虎之助は笑えないのに笑いながら またイチゴオレを飲む。相変わらず甘いイチゴオレ。

でも この前に比べて 少しだけ甘みが消えたように感じるのは私の心境の変化なのだろうか

それとも 虎之助のイメージが変わったからなのだろうか。

「オレさあ 和泉と別れようと思うんだ。」

この前のイチゴオレかどうか確認したくて イチゴオレのパックを凝視していたら

何気なく呟かれた言葉を 聞きそびれてしまった。

「えっ今 なんて言った？」

「だから 別れる！オレ 和泉と別れる！」

子どもが親に駄々を言うように 虎之助は大声で言った。
いや 別れるって言われても。

突然の駄々に困った親になった私は 何も言えなくなった。

「なあ 絵美。オレさあ 和泉に告白された時はさあ すごく嬉しかったんだよね。」

もう 和泉ってオレの中でモロ好みだったし だからさ 和泉が初彼女なら良いって思ってたからさ。」

そうか 虎之助の好みは和泉のような子か。

私は 虎之助の顔を見て 殴られた頬を見る。

虎之助って無意識に暴力的な女を選んでいると思う。

いや たぶん 本人もまさか 殴られるとは思ってないとは思っけれど

「でもさあ 日が経つとさ その嬉しさが無いんだよねえ。慣れたっていうか なんつうか。」

自分が気に入った女に告白されたことが嬉しかっただけで 好きだったのかなあって思ってたしまつて。」

「つまり 好きじゃなかったってこと？」

「いや好きは好きだけどさあ。何か 違うんだよね。」

虎之助は 鼻の上を何度も触れる。

照れるとやるしぐさに 私は予感を覚える。

「なんか 告られて嬉しくて付き合ったら違いましたって これさ 中学生の恋愛みたいだよな。」

ハハハと無意味に笑う。

けれど 私は笑えず ただ虎之助の頬を見ていた。

まさか その台詞を彼女に言っただろうか。

そしたら このケガは納得できる。

「だからさあ オレ ガキのままなんだよね 恋愛レベル。っていうか恋愛に対する考えが。」

虎之助は 空を見る。

でも瞳に映っているのは 雲1つない青空なんかじゃない。

きっと 今までであった数々の恋愛を思い出していたのだろう。

と言っても 私と同じで虎之助もあまり恋愛経験はない。

考えるならつい最近の出来事ばかりだろう。

その最近の出来事を思い出しては 時たまうなずき うんうんと言っている。

「だからなんだよ。うん そうなんだよ。だから お前に彼氏が出来たと聞いて 正直に落ち込みを見せられなかったんだ。」

虎之助は 思い出を映すのを止め 私を映し始める。

「本当はシヨックなのに強気になって ウソだと言ったり 絵美を怒らすようなこと言ったりしてたんだ。」

虎之助 もしかして 私に告白しようとしてる？

私は 虎之助を見ている。

でも瞳に映っているのは 真剣な顔をした虎之助なんかじゃない。

私も自分なりに経験してきた思い出を映していた。

幼稚園で好きになった先生のこと。

それから 虎之助を好きになったこと。

中学校の時 そこそこカッコいい男子に告白されていたこと。

それを助けてくれた虎之助と約束したこと。

高校の時に話してくれた友人のこと。

そして天使が願いを叶えて潔と付き合い始めたこと。

初めてSEXをしたこと。

虎之助よりも潔を好きになったこと。

「オレ 絵美のことが好きなんだ。」

虎之助が まわりに学生がいるにも関わらず 私を抱きしめてきた。

それでも私は 虎之助のことを映せず 思い出ばかりを映しだす。

相模が家に来て 号泣して言ってきたこと。

紫音が潔のマンションに来て 号泣して言ってきたこと。

「頼むから オレと付き合ってくれ。」

虎之助の言葉は届かず 思い出の声が聞こえる。

相模と紫音が言ってきた言葉が 私の耳に入る。

あなたは 何をしたの？

「ダメだよ トラ！」

私は 慌てて虎之助の体を& a m p ; # 2 1 0 8 5 ; した。

私よりひと回り以上はある虎之助の体。

けれど剥がれるのは意外と簡単だった。

きつと 虎之助も& a m p ; # 2 1 0 8 5 ; されると予感していたのだ。だから わざと力を入れなかったのだ。

でもベンチから落ち そのままドスンと地にお尻をつける。

「わかってるよ。お前にはK I Y O S H I がいるって だから両想いにはなれないって。」

剥がれた虎之助の瞳からは涙が流れていた。

初めてみた虎之助の涙。

「バカだよな。今さら 気づいてさ もう遅いのに…」

でもさあ…なんで K I Y O S H I と付き合っちゃうんだよ… お前 K I Y O S H I に何をしたんだよ？」

また 言われた。

思い返せば 私 みんなの涙を見た。

相模も紫音も潔も虎之助も みんなの泣き顔を見た。

そして 私も泣いている。

瞳を瞑つても 涙は溢れて来る。

どうして こんなことになったんだろう。

恋愛は楽しいもの。

なんて考えていたのに 潔と付き合えると分かった時に絶対幸せだと思っただのに。

その考えは幼稚すぎたのかな。

「私もだよ 虎之助。」

赤くなつた瞳に虎之助を映す。

「私も恋愛に関しては中学生レベルだよ。」

6日目 act・4

虎之助と別れて 家に帰ったら 考えるのが嫌になった。

明日で7日目だというのに 明日で最後の1日になるというのに 紫音の泣き顔を浮かべたら 潔に会いたい気持ちが無くなった。

いや会いたいけど 私と潔がいる間 紫音は何考えているんだろう と思ったら つらくなった。

虎之助のことだって あの告白を「うん。」って言えば良かったかも知れない。

だって 潔と付き合えるのは明日までなんだから

明後日になれば 私には彼氏と呼べる人はいなくなるのだ。

虎之助だって相模と別れて フリーになっただから 何の問題もなく付き合えるんだ。

でも うんと言えなかったのは やっぱり相模の泣き顔があったから。

今だって 絶対に相模は虎之助が好きだ。

好き過ぎての 虎之助の頬の痣だ。

これから ドシドシと虎之助に対して行動するかも知れない。

そしたら 虎之助だって 相模に参って復縁するかも知れない。

なんだか 誰かと付き合うことにより 誰かが泣くと思うと 恋愛って怖いなあ。

私 誰かの泣き顔なんて見たくないのに。

じゃあ 誰とも付き合わず 一生1人でいる？

それ すごく寂しいじゃん。

潔と付き合って 恋人の温かみを知ってしまったんだ。

私はこの先 恋人の温かみを感じないまま生きていけるのだろうか… できない。

じゃあ 誰かを泣かすのか？

それも できない…色々と考えていたら いつのまにか寝てしまっ

た。

すると 夢の中で知人に出会う。
それは潔でもなければ 虎之助でもない。相模でもないし 紫音でもない。

現れたのは高校時代の友人だ。

真白な世界に 友人はにっこりと立って 私を待っていた。

「久しぶりだね エミ。」

そういえば 友人は不倫をしてまで先生と付き合っていた。

友人のせいで たくさんの人が泣いたと思う。

まず先生の奥さんは絶対だし 先生には娘がいたからその娘も泣いた。

結婚したけど 友人や先生の両親はどうだったのだろうか？

もしかしたら 両親も泣いていたかも知れない。

でも 友人は先生を選び続けた。

それはなぜ？

友人も苦しかったに違いないのに 何度も泣いていたに違いないのに
それでも 先生と付き合ったのは…

「答えは簡単よ。」

友人は ニツコリと笑顔で言う。

「私は 先生が大好きだから 先生といたかったら 他に理由なんてないわ。」

そうなの？ そうかぁ そうだね。それが妥当だよな。

「エミ 納得してないでしょう？ でもさぁ 誰もがハッピーな恋愛なんてないんじゃないかなあ。」

誰かに恋したら やっぱ誰かが傷つくのは絶対じゃない？」
それ すごく分かった。

「でしょう？ だからエミ あなたは誰かが傷ついても良いっていう
ほどの人みつけなきゃ だめじゃない？」

えっ そうなの？ それって すごく我ままじゃない？

「うーん？ でも恋愛ってそう言うもんじゃない？ 他人の利益考えた

ら 誰とも付き合えないよ。」

まじかい。でも確かに そうだよな。

「あと 私ずつと気になってたんだけど。」

え？何何？

「もしね 私が天使の願いで 好きな人と付き合えたら ラッキー
て思うんだよね。」

自分何もしてないのにいいのかなあって思わないの？

「思わないよ。だって 好きな人と苦労せずに付き合えるんだよ。
超幸せ者じゃん。」

そうか… 全く考えられなかった。

「ってことは。つまりエミは そう思えるほど好きな人いなかった
んじゃないの？」

虎之助も違うってことなの？

「完全に好きじゃないってわけではないと思うけど… それに関して
も私が思うことがあるんだけど。」

え？まだあるの？

「うん。私 約束のために何十年も待てないよ。行動しちゃうよ！
エミは何十年も待っていたみたいけど。」

そうかなあ。

「そうだよ！好きな人が隣にいつもいるんだよ！もう言いたい放題
じゃん。私 高校の時は先生に毎日言ってたよ。」

先生にマジで怒られたけど。でも今は立場逆転ですけど。」

いいなあ。私もそうになりたい。

「なれるなれる。」

本当？私も それくらい好きな人がいるの？

「いるいる。どこの誰かはわからないけど 絶対いるって！」
絶対なんて 言うけど… いないと思うよ。

「いやいや 絶対いるって！！だからエミ 悩まないで。結局は好
きかそうじゃないかの世界なんだから。」

こうなったのもエミの好きな人は 虎之助でも潔でもなかったから

で済むんだから。」

そんな簡単なことでいいの？

「じゃあ 逆に聞くけど 他に理由があるの？」

数秒の沈黙。

ない気がした。

「でしよう？確かに 絵美は潔が好きだと思っよ。でも 紫音の涙で諦めてしまう程度の好きだった。

虎之助にいたっては 好きだけど潔に比べたら潔が好きなんでしょう？だから虎之助も好きでも 好きじゃない。」

ふむふむ そうか そうなんだ。

「エミ…恋愛量減っちゃったね。」

うん そうだね。減っちゃった。でも なんだろっ。ちくしょうとか 減らしたくなかったとか 後悔はない。

「へえ 後悔してないんだ。じゃあ エミは行動したんだね。」
行動した？私が？

「うん。自分で言っただじゃん。行動してたら 後悔はしなかった。って。」

そうか 確かになんだかんだ言っで 行動していたかも。潔に好きでいらっうために この関係を持続するために 行動していたかも知れない。

「でしよう？確かに人から見れば してないって言われるかもしれないけど。エミがそう思えばいいと思うよ。」

うん なんかちよつと安心したかもしれない。んで 元気出た。

「本当に？良かった。」

ありがとう 友人。

「いいえ。後1日好きなようにしなよ。」

うん そうする。

私の中にあつたモヤモヤとさせて重くなっていた 灰色の煙。それが高校時代の友人によって キレイになくなった。

これで最後の1日は 自分のやりたいようにやれる気がした。

まるで1週間以上の便秘が解消されたみたいに
すっきりと笑う私を見て 友人も口元を緩めた。
「あとね エミ。最後に1つ気になってたこと。」

えっ？まだあるの？

「うん これが1番気になってたことなんだけど…エミも薄々気づ
いてるんじゃない？」

ん？そんなのないけど…何？

「あの天使だけど。」

頭にポンと天使が現れる。

黒い髪に真白いワイシャツ。ヒョロヒョロとして話す関西弁の天使。
その天使が あの銀の線が入った瞳で私を見る。

「あれ 天使に見える？」

見えない。

即答で答える。

「でしよう？あれ 天使じゃないんじゃない？」

友人がそう言うのと パチンと友人が消えた。

真白い空間に私だけが残される。

たぶん 私が起きなければいけない時間が近づいているのだろう。
だからこの世界もお終いなのだ。

だんだんと 意識が現実世界のほうへ行く中

私は友人が言った言葉をもう一度言う。

あれ 天使じゃないんじゃない？

じゃあ あれ何？

7日目 a c t . 1

そもそも あの天使には謎がいくつもある。

その1 私の名前を知っているのはなぜ？

その2 私の過去を知っているのはなぜ？

その3 私と潔を付き合わせてくれることができたのはなぜ？

「その4 私にお礼をしたがるのはなぜ…」

ハタハタオムライに乗っかっている アメリカ国旗をゆっくりと取り除く。

場所も時間も席も全て天使と会った時と同じ。

そして今 あの時と同じハタハタオムライスを食べている。

けれど天使は現れない。

最後の日だし来ると思ったのに。

アメリカ国旗をハタハタと動かす。

結局 あの1度だけ現れた天使。

もう2度と会うつもりもないのだろうか。

私 このままいろんな謎を持ったまま 明日は普通に帰るのかな？

案外 記憶も消されたりして。

まあ消された方がありがたいかもね。

パタパタとアメリカ国旗を強く回しながら考える。

「何してるの？」

目の前に男の人が立つ。

私は 男の人があの天使かと思い 慌てて顔を上げる。

「それ 絵美が車で話してたハタハタオムライス？」

そこには黒いニット帽子を深くかぶった潔がいた。

「おいしそうだね。オレにちょうだい。」

最後の潔とのデート。

場所を潔に任せたら 私の大学となった。

10代で音楽を始めた潔にとって 大学は憧れの場所らしい。

この空に近い食堂。

そこにあのKIYOSHIがいるなんて誰も想像つかないのだろう。
しかも 格好が黒のニット帽に

慌てて買ったユニクロのグレーのトレーナーで ズボンは紺のスエ
ットボトム。

いつも革ジャンが似合います。のKIYOSHIからは想像つかない格好をしている。

私も最初会った時は 笑ってしまった。

「安いし うまいし 食堂いいな。」

潔はパクパクとハタハタオムライスを食べ そして先ほど買いに行
っていたうどんも食べる。

結構 食べるんだよね 潔。

華奢な格好してるのに 意外だ。

「絵美も食べるよ。」

スプーンにオムライスを乗せると「あゝん」と言いながら 私の口
元にスプーンを運ぶ。

私は 何度も食べてるよ。 と思いながらもオムライスを口にする。

「おいしい。」

潔が運んでくれたオムライスは いつもと味が違う。

「だろ？」

だろ？ だって それ私を買って来たんだけどな。

相模が来た時に見た不安げな顔といい この自己満てきな笑顔といい
潔は少し子どもっぽいいところがあるかも。

こういうところ きっとTV見てたりとか音楽聞いたりしてるだけ
じゃ わからないんだろうな。

大学が憧れの場所で

学生になりすますために トレーナー着たり

大食いだったり 子どもぽかったり

今日だけでも こんなにも新しい発見がある潔。

新しい発見を見つuckerたび 私はまた潔を好きになる。

でも 新しい発見も今日で終わり。

潔とは今日で終わりなんだ。

少し瞳が熱くなる。

けれど 今日は泣かないで別れようと決めたんだ。

私は瞳に力を入れ 涙が流れそうなのを止める。

そのため少しだけ視線が強かったのかもしれない。

自分の顔ばかりを見る私に 潔は少し笑みを作った。

「何？オレの顔おかしい？」

「いや…その…瞳もいつもと違うなあって。」

まさか 今日の別れを惜しんでます。なんて言えない。

私は 茶色になっていている潔の瞳を指摘した。

「ああ 昨日さあ プロモ撮影のために買ったんだよね カラコン。」

「似合ってるよ その色。」

「まじで？ありがとう。絵美もしてみたらいいじゃん カラコン。」

「ええー無理無理。私 コンタクトでさえ 入れたことがないのに。」

「絵美なら似合うって。グリーンとかレッドとか。」

「グリーン？レッド？そんなに色にバリエーションあるの？」

「あるある。目がハートになるのとかあるんだぜ。」

「ええーまじで。」

瞳は丸でしょう。ハートとかにして いったい誰に好意をふりまくのだろうか…

いやファッションなんだから 好意は関係ないだろう。

「それがあるんだよねえ。そんな目で見られたら忘れられないだろうな。」

うん 忘れない。てか インパクト強すぎでしょう。

たかが瞳にどれほどの個性を出すのだろうか。

瞳 個性 ハート型…私はふと1つの瞳を思い出す。

「ねえ潔 銀の縦線が入ったカラコンってある？」

この発想の原因はもちろん あの天使だ。

これで ある。 と言われたところで その先は何も浮かばないけれど

でも なぜか引つかかるのだ あの瞳。

「銀の縦線？それって どんな感じなの？見たことないんだけど？」
恐らく潔は 数字の1みたいに細い線を考えているのだろう。

「なんて言うんだろう ちょっと真ん中はぶくつとしてるんだけど
…」

私は あの天使の瞳を思い出し 言葉にする。

「ぶくつと…それって キャットのこと？」

「キャット？」

「そう猫の目みたいな カラコンじゃないの？」

猫…

そうだ あの天使の目 猫の目してるんだ。

って ことは化け猫？

いやそれは違う気がする。 てか 化け猫って女じゃないの？

でも なぜか猫はあってる気がした。

それはなぜ？

猫 猫 猫？

とポツリと呟き始めた私。

潔は 少しだけ瞳を細め

「何 猫猫言ってるの？そろそろ行こうか。」

ガコンと音を大きく鳴らしイスを引くと 立ち上がった。

いかん いかん。

天使の正体がわかってうがわからまいが 潔とは今日で最後なんだ。
潔のことに集中しなきゃ。

7日目 a c t . 2

「何か聞かない？」

大学から潔のマンションに向かう途中だった。

「いいよ。何聞くの？」

「絵美に聞いてほしい歌があるんだ。」

潔はそう言って 再生ボタンを押した。

「これ オレが作った新しい歌。」

潔の歌。

ピアノで始まった音楽は バラードで出来た歌だとすぐに分かった。

「絵美のこと考えて作ったんだよね。」

私は 潔の顔を見る。

潔は 運転しているから あたり前なんだけど ずっと前の景色を見つめていた。

でも 少しかだけ頬がピンクに染まっている気がした。

私は 瞳を真丸くして潔を見る。

何か話そうと思った。

私の歌？とか いつ作ったの？とか ありがとう。とか

でも それよりも今耳に入ってくる歌を聞くのが 最優先だと思い

私も 景色を見ながら潔の歌を聞いた。

D o n ' t c r y b a b y

僕が悲しくなるから

P l e a s e b a b y n e e d m e

僕が君を守るから

B a b y , s m i l e a n d s m i l e

それだけで 幸せになれるよ

色々 あったね。

色々 あるよ。

色々 あるなら

その色々も全て抱きしめるから。

だから

Don't cry baby

僕が悲しくなるから

Please baby need me

僕が君を守るから

Baby, smile and smile

それだけで 幸せになれるよ

詩を読むように

気持ちを伝えるように 歌う潔に 私は涙を流す。

「泣かないでって歌のなのに 結局泣かしているな。」

赤信号で車が止まると 潔は私の頭を撫でてくれた。

潔 ありがとう。そしてごめんね。

今日で 私と潔は終わる。

でも後悔はないよ。私 潔と付き合えてよかった。

今 この歌を聴き 確信する。

初めてを潔にあげて良かった。

信号が青色に変わる瞬間 私は呟く。

「私 潔のこと好きだよ。」

潔は 知ってるよ。と言って軽く笑った。

これが 私が言う 潔への最後の告白になった。

7 目 a c t 3

潔のマンションに着くころには

私の瞳は 涙によって視力を失っていた。

世界がずっと水に浸ったままで 視界はぼやけている。

潔からもらったハンカチを瞳にあてたまま 私は車からおりる。

「車置いてくるから 先にマンション入ってな。」

本当に泣かすつもりなかったんだけどな。

潔はマンションに着くまで そう言いつづけ 私の頭を撫でてくれた。

その優しさを思い出し

私はこの瞬間さえも明日はないと思ってしまい さらに泣けてきた。

「ううん マンション入らずに待ってる。」

ハンカチで瞳を隠す。潔は 少しだけ眉を緩めて困ったような顔をした。

「わかった。風邪ひくなよ。」

私はコクンと顔を下げると 車は駐車場へと向かった。

泣き疲れて力が入らない。ゆっくりとその場でしゃがみ込む。

ハンカチからゆっくり瞳を剥がす。

今日は晴天。雲ひとつない空に これ見よがしに太陽が主張している。

眩しい光が私を刺す。

私は 空を見ながら思う。

ねえ 天使。あんたは この空の上の住人なの？

それとも 私と同じ世界の住人？

てか あんたやっぱり天使じゃないでしょう？

私 少しだけ気づいたんだよね。あの瞳を見て 思い出したんだよ。

あんたは天使じゃなくて…

ブルブル

コートに入っていたケータイが揺れている。

天使の存在を考えていた瞬間に 鳴ったケータイ。

私はまさかと思い 慌てて立ち上がりケータイを取る。

画面には非通知という文字。

これってもしかして もしかしなくても…あいつから？

私はゆっくりと入のボタンを押し ケータイを耳元にあてた。

「もしもし？」

ケータイから声は聞こえない。

「もしもし…誰？」

確認のため もう1度声をかける。

もちろんケータイから声は聞こえない。

私の考えは確信する。相手は きつとあの天使だ。

「ねえ あんたどこにいるの？空とか つまらないこと言わないよね。」

私 あんたにはビンタしたくてもしょうがないんだから。」

なんでえ 僕 エミちゃんのためがんばったのにい。

あの天使ならそう言うだろうか。

思わず笑ってしまう。フフフと言う声が 天使に聞こえたかも知れない。

でも これは天使だからわかる会話だ。

そうケータイの向こうにいる相手が天使ならば。の話だ。

…いるの？

声がかすかに聞こえた。

本当に ちょっとだけ聞こえた声。でも その声で相手は天使じゃないとわかる。

だって声の持ち主が女だからだ。

「えっ？」

なんで そこにいるの？

「そこって…」

そこは 私の場所。あなたが来ちゃだめ。

ふと

声が ケータイからではなく

背中から聞こえてる気がして 私は後ろを見た。

「この場所は私と潔の場所なの。あなたは邪魔なのよ。」

この前 会った時よりも一回り小さくなり 少しだけ顔が青くなっている紫音がいた。

怖かったのは全く紫音の気配に気づかなかったこと。

こんなにも紫音の息が私の頬にあたるほど 近くにいたのに…

「番号勝手に登録しててごめんね。」

恐らく以前 ケータイ電話を持った時に 番号を覚えたのだろう。

右手で携帯を持ち小さな耳にくっつけ 携帯に向かって私に言う。

「私 あれからずっと考えたの。あなたがいなければ 潔は私のものなんじゃないかって。」

紫音さんがあまりにもキレイでキレイすぎて怖い。

私の口元は震えていて言葉がでない。

「だから あなたが消えればいい。」

何言ってるの？

そう言葉に出そうとしても口元が震えて 彼女が怖くて。

違う。そんな理由じゃない。

紫音の両手。

右手は携帯持っている。じゃあ左手は？

私は紫音の左手を探す。

紫音の左手は私のお腹あたりにいた。

包丁を持っていた。その包丁が私のお腹に入ってるのが見えた。

私 もしかして刺されてる？

そう思ったとき 激痛が走った。

私は その場でしゃがむ。

自由になった紫音の左手には 私の血がべっとりとついている。いつから刺された？

こういうのってすぐに気づくはずじゃないの？

自分 どれだけあの天使に必死だったんだろう？

いや 今はそんなこと考えちゃ駄目だ。

そう思っただけでも 私の感覚は痛いことしかなく 頭で文字を浮かべることも難しくなっている。

くだらないことだけが頭に浮かんでいて 瞳は黙って立ちつくしている紫音を見つめている。

紫音は 刺されたお腹を両手で押さえ寝転がる私を見下す。

そして 瞳から一滴涙をこぼした。

「こうすることしか思いつかなかったの。ごめん。ごめんねえ。」
ごめんって。

そうか そうだよな。許すわ。

なんて言うか！！

でも なんだろう。

刺されたのに 私なんか納得してる気がする。

だって紫音に私 迷惑かけたもん。

ただ思いつきで潔が良いと言って 紫音と潔を離れたんだもん。

何の苦勞もせず 簡単に潔と付き合えたんだもん。

そのツケがこれっていうなら。

なんか 納得してしまう自分がいる。

いや 死ぬことに納得しちゃだめだろう。

いくらなんでも刺しちゃだめでしょう？

もしかしたら 明日になったら紫音と潔は元通りになるかもしれないのに

そう。

明日になれば 私は潔と別れるんだ。

だったら…なんか明日が来なければいい。

ずっと今のままがいいかも。

いや でも死にたくはない。

けれど 明日も来てほしくない。

あ 自分 矛盾。

それにしても空 青くない？青すぎない？

もしかして このきれいな空から天使が下りてきたりして。

フランダースの犬みたいに 空から天使が下りてくるのかな？

もしかして あの天使が下りてくるの？

でも あいつは天使じゃないんだよね。

自称天使なんだって。

だって 会ったことあるもん 私。この前会ったことあるもん。

そう

きつと

あれだ。

あの時の

：

：

：

そして 私は意識を失った。

7日目 act・4

太陽が朝を告げるため 光りを私にあて フツと意識を戻した。
私は自分の部屋にいた。

起き上がって 最初に確かめたのは もちろん自分のお腹。
見たくもない ふくよかなお腹が瞳に映る。

体系的には大丈夫じゃないけど でも大丈夫。無傷だ。

「良かったあ。」

体中で息を吐き出す。

本当 刺された時はどうなるかと思ったよ。

まさか紫音に刺されるなんて しかも男問題で。

こんなこと虎之助に話したら 「お前 夢見てるんじゃない？」
って言われるかも。

こんな発想 前もしたわ。それで結局 夢じゃなかったんだよね。
「ん？」

私 お腹の次に確認しなきゃいけないことあるんじゃない？

くの字になった体を起き上らせるため ピンと背筋を伸ばした。

そうだ。そうだよ。今日はいつたい何日？

体を180度動かし 枕元に置かれたケータイを手取る。

日付と時間を確認する。

そして 私は言葉を失う。

「うそ・・・30分も寝坊してる・・・」

やばい 必修の授業って午前に集中してるのに。

なんで鳴らなかったんだよ。目覚まし時計を睨みつける。

すると時計の針があからさまに違う時間をさしたまま止まっていた。
どうやら電池切れ。

それどころかケータイがピーと鳴り 真っ黒な画面を映した。
これ電源切れたんじゃない。

「うそでしょう...」

ケータイにつないでいた充電器が取れていた。充電していたつもりがしていなかったのだ。

しかし 時間が分かった今 ケータイは要なしだ。

早く大学に行って 遅刻でもいいから授業参加しなくては！

慌てて布団から離れて 顔を洗い 着替えをする。

そして ソバカスだらけの顔を隠すために化粧を開始する。

時間はない。でも せめてファンデーションぐらいいはしないと。

そう思いファンデーションのコンパクトを開ける。パカッと空のファンデーションが見えた。

どうやら ファンデーションも切れたようだ。

目覚まし時計も電池切れして ケータイも電源切れして そしてファンデーションも切れて…

ん？

これって あの日と一緒にだよね。あの天使にあう日と一緒にだよね。

私は 窓から外の景色を見る。

外は大雨で あの日と同じ天気だ。

なんだこれ。

もしかしてタイムスリップしてるのか。

つまり 潔との付き合いを1週間経験したら 1週間前に戻るってことなのか？

茫然として 外の景色を見る。

外の景色には 私がこれから外で見る予定である4匹のクラスが待っていた。

そうだ。私はこの後 外を出た時に傘を忘れたことに気がつくんだ。それで また部屋に戻って傘を持って 走ったら 4匹のクラスに会うんだ。

それで その後…

茫然としていて フワフワする頭に電気が走った。確信がある。

もし今があの一週間前と同じなら 私はきつとあいつに会えるのだ。

あの自称天使に。

そう思った時 私ほろくに準備をしないまま そのまま部屋を飛び出したのだ。

サンダルを履いただけで外に出たから 体中雨に濡れている。けれど気にしない。私は走り 4匹のガラスの前を通過した。

そして そして…

「久しぶりやなあ エミちゃん。」

1週間ぶりの再会。いや タイムスリップをしているなら再会とは言えないよな。

とにかく いたのだ。あの自称天使が。

私と同じで雨に濡れて 立って待っていた。

そして自称天使の足元には 私が以前見た黒猫の死骸があった。

私がかぶせた 黄色いハンカチを覆ったままの黒猫の死骸だ。

今は お昼寝しているみたいで可愛い黒猫だけど

実はハンカチを取ると グチョグチョになった体が見える。

「ほんま 見る人みんな不愉快な顔していてさあ。朝から えらいけつたいなもの見たって言うんよ。」

こっちは死んでるのにさあ。ほんま泣きそうだったんやで。」

自称天使はそう言ってしゃがみ込み 黒猫を いや自分の姿を見つめていた。

「でもさあ エミちゃんは立ち止まって ハンカチ被せてくれた。かわいそうって言って こんどは幸せになってって言って…」

覚えてる。

自分は今日ついていないと思いながらも 道路でひかれてしまった黒猫を無視できなかった。

かと言いつつ こんなグチョグチョの体に触れる勇氣はなく ハンカチを被せた。

「雨やったけど ハンカチ温かったよ。僕 エミちゃんに感謝してるんや。」

自称天使は 黒猫の頭を撫でる。

「だから お礼したくなあ…でも なんか色々困らせてしまったなあ。」

自称天使は両手を顔の前に合わせ大声で言う。

「ほんまに申し訳ない！」

いや そんな謝られても…私はただ ハンカチ被せただけだよ。それなのに こんなご褒美くれるなんて。

てか なんで天使なんて言っただか…

私の一言一言のぼやきは 大雨の音によつて消える。

ゆつくりとしゃがみ込み 触れられなかった黒猫に触れた。

冷たい雨のシャワーを浴びて ヒタヒタになっている黒猫。

私の薄っぺらいハンカチが 暖かく感じるなんて うそだ。

それなのに嬉しいと思ってくれたなんて そして1週間も潔に付き合わせてくれただなんて。

黒猫から視線を外し 今度は自称天使を見る。

「ありがとう 黒猫。私 すごく嬉しかったよ。」

大雨に負けないほどの大声を出した。

すると 自称天使はにっこりと笑った。私も負けずとニッと笑った。

「ありがとう エミちゃん。ほんまに ありがとう。エミちゃんは暖かい人だわ！」

天使はそれだけ言うとスッと消えた。

残された黒猫の死骸を 私はずっと見つめていた。

そして何度もつぶやいた。

「本当にありがとう。」

誕生日

ピッ…

昔の約束

ピッ…

最悪な日

ピッ…

自称天使

ピッ…

恋人

ピッ…

黒猫

ピッ…

ピッ…

ピッ…

なんだ？この電子音？

色々考えたいのに　すごくじゃま。

ピッ…

この音消せないのかなあ？あつ　私が消せばいいのか。

瞼を開く。

ピッ　ピッ　ピッ　ピッ

私は音が聞こえる方を見た。

本当は体を動かして見たいんだけど　体どころか顔さえも動かせない。

意識だけがあり　体は眠っている感じ。

だから瞳だけ　音がする方を見る。

あつ　この音は止めることできない。これ心電計だ。

私の心臓　動いてるのかを確認してる。

っていうか私　心電計で図られるほど重傷なの。

いや それよりもここどこだよ。心電計があるなら病院だと分かるけど。

じゃあ さっきまで見ていた黒猫は夢で 今が現実になるのか？
今何日だ。私と潔はどうなったの？てか紫音は捕まるの？私の体は大丈夫なのか？

…だめだ。頭がゴチャゴチャしてる。

「わけわかめ。」

思わず呟いた言葉。声が出てきたことに驚いた。

体動かせないから 声なんて出ないと思っていたのに。声は出るんだ。

「…絵美？」

足元から声が聞こえた。

私1人だけかと思っていたけれど 誰かいたんだ。

「絵美 起きたのかよ？」

声は聞き覚えがあり どうしてか懐かしく 甘い香りがした。

昔から親しんでいた声に 私は意味もなく瞳から涙を垂らした。
やっぱり最終的にはこいつか。こいつが残るのか。

「虎之助 いるならいるって言えよ。」

怒ってだした言葉が かすれ声となり虎之助に当てられる。

「お前 大丈夫なのかよ？」

視界に虎之助が映る。瞳の下にクマが出来ている。瞳が赤くてウサギみたいだ。

いつもと違う虎之助の表情を見て確信できる。私 どうやら重傷みたいだ。

体が動かないのも納得できる。

「大丈夫…じゃないよお。私 どうなってるの？」

虎之助は タラタラと垂らしている涙を丁寧な指で拭きながら言う。

「お前さあ K I Y O S H I のファンに刺されたんだよ。なんで絵美がK I Y O S H I のマンションにいるんだよ？」

K I Y O S H I 今 紫音との婚約でファンが殺気立っているのに…」

自分が体験した事と 全く違う事を説明され 私は言葉を失う。
ファン？紫音との婚約？私と潔が付き合ってることは？紫音に刺されたことは？

全く理解できない。

でも考えていた通り 私と潔は付き合っていたことは なしになっているのだ。

潔はK I Y O S H Iになったのだ。

ぼけーと今の現状を整理している私を見て 虎之助は笑う。

「何がおかしいの？」

私 こんな重傷なんだよ？

「いや ファンがさあ。お前を紫音と間違えて刺したんだよ。お前を紫音とだなんて…全然似てないのに。」

プププと虎之助は笑う。

こいつ 本当にビンタだ。体が動けていたら すごいビンタをしたい。

私はフツフツと怒りを沸かしている中 虎之助はずっと笑う。

プププがアハハになり そして両手で顔を隠し シクシクと泣き始めた。

「良かった。お前 生きていて良かったよ。」

私の胸がキュンと鳴った。

やっぱり戻るべきなのかな。虎之助が好きだった時に。

だって 潔と付き合っていたことは消えたんだ。なしになったんだ。そうなしなんだ。

なし？

あんなにも潔が好きだった気持ちがない？

あんなにもたくさんの人を泣かせて 心を痛めたこともなし？

「虎之助…相模とはどうなったの？」

シクシクと泣く虎之助を慰めるわけではなく 突拍子もない質問をした。

「えっ 和泉のこと？どうなったって？」

「別れたんじゃないの？」

「…何それ？勝手に別れさせるなよ！」
じゃあ別れてない…

つまり 虎之助が私を好きになったこともなしなんだ。

「そっか…」

いったい なんなんだったんだ この1週間。

私がお色々とぐるぐるしたこと 本当に全てはなくなったのか？
意味がないことになったのか？

頭の中で1週間の出来事を浮かばせる。

すると 記憶も感情も私の中ではしつかりと残っている。

私の中では なしにはなっていない。

なしにはなっていないんだ。

「まあ とりあえずさあ。」

虎之助は 鼻のてっぺんを触る。

「誕生日おめでとう 絵美。」

少しだけ照れて言ったセリフが 胸をくすぐる。

私は自然と笑みを作り 言う。

「ありがとう。」

そして実感する。

なんか今の状況は 色々と言がわからないけど
とにかくあれから1週間が経ったんだと。

そしてもう一度言う。

「本当にありがとう。」

虎之助も相模も紫音も潔も高校の友人も黒猫も
みんな ありがとうだ。

私のとんだ願いを叶えるため付き合ってくれて
私に好きという気持ちを気づかせてくれて…

私の笑みの深さに虎之助は全く気付かず

まさか病院で祝うなんてな。一生のうち あるかないかだよなあ。
なんて のんきなことを言っている。

「虎之助。」

私は頭に1週間の出来事を頭に浮かべる。

「私 今度好きな人ができたらね。絶対に自分から行動するんだ。もう待ったりはしないよ。」

さつきから突拍子もないことを言うなあ。こいつ大丈夫か？

瞳孔を大きく開き虎之助は私を見る。

虎之助 1週間のことも何もしらないもんな 当然か。

でも 言わずにはいられない。

私にとってはなしになっていない1週間の感情。

そう なしにはできない感情。

「虎之助は覚えてる？」

虎之助が自ら話し出した思い出を今度は私が話す。

「覚えてるって何が？」

「中学生の時にした約束だよ。」

「…ああ そう言えばしたなあ…」

本当はしっかり覚えてるくせに。

そう思いながらも 私はその思い出を話し そして 最後に言う。

その約束を守って欲しかったんだよ。と

虎之助は ちよつとだけ肩を震わせ だいぶ黙っていたけれど

結局 言った言葉は

「ごめんオレ 相模が好きだから 約束は守れないわ。」
だった。

私は その言葉を聞いて やつと虎之助にしていた恋を終わらせる
ことができた。

それだけでも 充分にあの1週間が意味あるものになった。

エピソード

21歳になる1週間前。

私は 虎之助に彼女が出来た後 かなり落ち込んでいたみたいだ。んで 元気がない理由が 自分にあると全く気づかない虎之助は私を心配して「すごく元気になるよ。」と K I Y O S H I の C D をあげたらしい。

まあ 虎之助が大好きだった私から見れば

「元気がない理由」は何か気づけよ！とビンタをしたかったにちがいない。

でも 行動に動かせない私は 素直に K I Y O S H I の C D を曲聞き K I Y O S H I を好きになった。

そして 熱烈なファンとなっていた。

そんな時に紫音との婚約発表。

「たぶんさあ。オレにも失恋して K I Y O S H I にも失恋して 絵美は気が狂っていたんだよ。」

「それで井上さんは K I Y O S H I のマンションに行ってしまったんですね。」

「それでさあ そのなんだ？ファンにグサッと刺されたんだよ。」

「紫音に間違われたなんて 嬉しいんだか嬉しくないんだかですね？」

虎之助と相模はそう言っ て お互い見つめ合い ニコニコと笑った。私は 2人を睨みながら ハタハタオムライスを食べる。

こいつら 3か月ぶりに学校へ来た私に 祝いの言葉とかないのか？1週間の記憶を無くしている（ということになっている）私に

2人は1週間の出来事を まるでドラマのあらすじを話すように耽々と話した。

「いやあ でも 退院できてよかったわ。」

「そうですよ。本当に良かったです。」

「祝いの言葉遅い！」

オムライスを思いつきり スプーンで刺す。2人声を合わせて まああと言った。

このバカップル。私が知らない間に 双子見たいに意気投合して LOVE LOVE になつて。

1度は別れた2人なのに。

1ミリほど 別れさせたままでも良かったかも と思いながらも ガツガツとオムライスを食べる。

「しかし 退院の日は驚いたわあ。」

虎之助は私の悪魔の心にも気づかずに ラーメンを食べる。

相模は 虎之助のラーメンを小さな皿に入れながら

「KIYOSHIが来たんですよね 退院の日。私もお見舞い行けば良かったあ。」

まあKIYOSHIよりトラの方がかつこいいけど。

惚気を聞きながらも 私は退院の日を思い出す。

「本当に申し訳ないです。」

KIYOSHIはそう言つて 頭を下げた。

髪の毛は真っ黒くなつていて なんだか 私の知っている潔ではなくなつていた。

隣には紫音もいて 一緒に頭を下げていた。

お互い薬指に 婚約指輪をつけていた。

KIYOSHIと紫音が謝っている間 私はずっとその指輪を見つめていた。

本当は自分ももらえていたかも なんてほんのちよっぴり思った。

「大丈夫です。心配いりませんから。」

私が2人に言つたのは この台詞だけだ。

「絵美 興奮すると思つたのに 結構冷静だったな。」

虎之助も同じシーンを思いうかべていたらしい

「虎之助は口が鯉になつた。」

私は そう言つて口をOにして 閉じたり開いたりして笑った。

「だって K I Y O S H I だぜ。本当 驚いたわあ。」

「紫音もいたんでしょう？すごいですよねえ 有名人が目の前にいるなんて。」

考えられない。相模はそう言って 1 本だけ麵をすする。考えられないか…

「ねえ もし 私が K I Y O S H I と付き合ってたらどうする？」何気なく言った台詞に 虎之助と相模は同時にゲラゲラと笑う。

「お前 刺されているのに こりないなあ。」

「現実見た方がいいですよ？」

現実？本当の現実を言おうか？

黒猫が天使なんて名乗って 潔と 1 週間付き合わせてくれて最終的に 紫音に刺されたけど 全てはなしになっていた現実を。信じてくれるはずはないよなあ。

そもそも叶えてくれた黒猫がいなんだもん。私 1 人語って 信じてももらえる話ではない。

実は 退院後すぐに 黒猫がいた場所に行った。

数か月経った道路には もちろん黒猫の死骸はなかった。

ただ 死骸があつた道路の壁には 小さな花束が飾られていた。

その花束は黒猫に向けた物なのか 他の誰かに向けた物なのかかわからない。

私は その花束を見つめ もう一度ありがとうを言った。しっかしさあ。

黒猫も人間の姿にならなくてもいいのに。しかも天使だなんて言わなくても。

猫の姿のままで「あの時の黒猫なんですけど。」って言ってくれれば私もバカみたいに疑って「K I Y O S H I と付き合いたい！」なんて言わなかったのにさあ。

コップに入れていた水を一気に飲みする。

その飲みっぷりを 2 人は見つめ「おー」と言う。

「水 お代わりしてくる。」

席を立ちあがる。

ずっと バカップルを見ていて気付かなかったけど
昼時間になった食堂は全て満席で

ところどころ席が空くのを待って 立ちつくしている学生たちが見える。

そんな沢山の人の中 私はあの黒猫を探してしまう。

もういるわけないか。

まっいたら いたで困るけど。

イスから数歩離れる。

「あの。」

後ろから声が聞こえ 私は180度体を動かした。

「ここ空きますか？」

瞳に映ったのは真白いシャツに 艶のない黒髪。

やばいな私。黒猫に会いたいからって 幻覚見えちゃうなんて。

目の前に映る学生が黒猫に見えちゃうなんて。

違う人だと思いながらも 体が動かない。私は その学生を見つめたまま。

「あーごめん。こいつ 水入れてくるだけだから。」

言わなければいけない台詞を 虎之助が代わりに言ってくれた。

「そっかぁ 残念。ありがとう。」

ありがとうの発音が 関西弁のありがとうだ。

まさか話し方も関西弁に聞こえるなんて どこまで幻覚を見てしまっているんだ私。

瞳を瞑って 顔を左右にふった。

しっかりしろ。現実を見る。何度も頭をふる。

「あの…」

目の前で何度も頭をふる私に 学生は弱々しく声を出す。

もしかして変人にみられたか？

私はぴたりと顔の動きを止めて 学生を見た。

「もし違ったら すんません。天使知ってますか？」

天使と聞き 金髪で白い羽の天使を思い出さず
黒猫の自称天使のほうを思い出してしまった。

そして 私の瞳に映るのは幻覚ではなく 実際に黒猫に似た学生だと確認した。

「天使って言ってもあかんか…いや あの 何言ってるんだろう？
って感じですよね？」

言葉出さず自分を見つめ続ける私に 学生は少し頬を赤くした。

「あのですね…僕の飼ってた猫が死にましてね…その猫の名前が天使って言う名前なんですよ。」

いや その猫を知ってるかなあと思って…」

「どうして？」

「どうしてって言われても…いや なんとなく？つうか… ほんま
変な話してますよね？」

あかんわ。ほんましようもな。

学生はそう言って 狐のように細い目をして笑った。

何も話さず 自分を見つめる私に 学生は何も知らないと思い

「いや 知らなかったらいいんです。」

溜息交じりにそう言って 私に背を向けようとした。

あかん！！このままでは終わりになってしまう。

「知ってます！」

やっと声を出す。

「その猫 黒猫ですよ？あなたの姿で私の前に出てきました！！」

もし黒猫が人間になつて来たのに意味があるなら

もしあの1週間を無駄にしない方法があるのなら

この学生に全てを話すしかない！

私はそう思い 非現実的なことを言葉にした。

今度は学生の方が 黙りこくって私を見つめた。

やば。

もしかして 黒猫を知ってるかどうか を知りたいだけであって
願いを叶えてもらったとかはいらないんじゃないか。

今度は私が顔を赤くする。

その表情を見て 学生は軽いため息をして笑った。

「僕もなんです。僕も願ひ叶えてもらいました。天使 あなたの姿をして僕の前に現れましたよ。」

つながった。

1週間の出来事が 現実として今繋がった。

「ねえトラ。井上さん 大丈夫かな？」

私と学生の会話を聞いていた相模。

「いや 向こうも話あつてるし大丈夫だと思う。」

全く会話の意味がわからない虎之助。

2人にはわからなくてもいい。

この学生がわかってくれればそれでいい。

バカッブルの会話を聞き 学生は力の抜けた笑いをした。

「現実感ないなあ。とりあえず 名前教えてもらってええ？」

「井上 絵美です。」

「絵美ちゃんか。」

絵美ちゃん。

その言葉は1週間前に聞いたことがあり 懐かしく感じた。

私は 21歳の誕生日に虎之助に言った誓いの言葉を思い出す。

私 今度好きな人ができたらね。絶対に自分から行動するんだ。もう待ったりはしないよ。

そう もう待ったりなんてしない。

ドクンドクンと言う心臓音を確認して私は言う。

「あなたの名前も教えてください。それと…よかったら これから2人で食事しませんか？」

よかったなあ エミちゃん。

空の上のから あの黒猫が笑っている気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3904e/>

7 Days

2010年10月11日00時16分発行